



満天の星空

両腕を広げても抱えきれない無数の瞬き

草木ひとつ見当たらない砂漠に

戦火を逃れてやってきた人々のキャンプ

360度の地平線がオレンジ色に燃えはじめ
星は歩を引いていった

テント暮らしの人々は
どこに向かうのだろうか

過酷な毎日の暮らし
熱い太陽、わずかな水、食べ物…

2006 年夏ベラルーシ訪問団 ベトカ地区病院との新しい繋がり



日本からの支援医療機器を、大切に使って診断をする地区病院を訪れた若い技師の卵たちは、自らの専門性の原点をこの地で見つけたのではないだろうか。

2006 年夏ベラルーシ訪問団 ベトカ地区病院との新しい繋がり

・医療機器支援	
医療機器管理体制の構築進む <瓦谷義隆>	6
・2006 夏スタディツアー <菅 直哉>	10
・ベラルーシ医療支援報告	12
モスクワ便り	13
・院内学級支援	
こんにちはベラルーシ <カ丸邦子>	14
チェルノブイリからのメッセージ	24
ベラルーシの食卓	28

第5回 JIM-NET 会議 イラク子どもの白血病治療支援

治安悪化の中で踏みとどまる医師に支援の継続を！	
<井下 俊>	30
小児科医の視点からの今後の課題 <松澤重行>	39
サブリーンプロジェクト <国井真波>	48

連載随筆「メメント・モリ」 <宮尾 彰>	50
ロシア小話	52
振替用紙のメッセージから	54
ありがとうございました	56
JCF 募金のお願い	59
ニュースクリップ	60
Здравствуйте! (事務局広場)	62
本の紹介 Book review	64
インフォメーション	66
事務局日誌	67

医療機器管理体制の構築進む 患者搬送体制などに問題点

瓦谷義隆（赤穂市民病院臨床工学部）



ベトカ地区病院医師と医療機器のチェックをする瓦谷さん

期待と責務を抱いた出発

名古屋大学附属病院在職中、心臓大血管手術における人工心肺装置業務を中心に補助循環や動物実験、そして最新の医療（ME）機器の準備・操作・運用・管理など、廣浦学氏に指導を受けてきました。その後、岡山大学附属病院にて小児体外循環や肺移植などの症例を経験し、現在は地域医療中核機能病院である赤穂市民病院で臨床工学技士の業務を遂行ながら最先端医療に携わっています。あれから15年余りの月日が経ったいま、師匠である廣浦学氏と共に海外医療支援活動のために第84次ベラルーシ共和国訪問団の一員として視察訪問へ向かうことになったのは感慨の思いであつた。そして、出発前に在宮ベラルーシ共和国名譽領事館の名譽領事である新宮千早氏より激励のお電話をいただき、また現地での状況を詳しくご指導いただいた事は今

回の訪問での責務の重要性を痛感いたしました。

出発当日の中部国際空港（セントレア）で、スタディツアーに参加する東海医療工学専門学校の8名の学生諸君と合流しました。各自それぞれの思いに目を輝かせ、この旅に期待を膨らませているのを感じた事が新鮮であり、自分自身も彼ら同様にこれからの旅に胸がときめく一瞬でありました。

中部国際空港（セントレア）を立ち韓国（インチョン）、ロシア（モスクワ）を経由し、遠く約8000km離れたベラルーシ共和国へ向かう2日間の行程はこれほど自分自身の人生を振り返ったことがあつたのだろうかと思うほど充実していたような気がします。車窓の眺めを満喫しながら恩師と共に昔話をしながら…。

子供たちとの交流

ベラルーシ共和国ゴメリ駅到着後、国立放射線医学人間環境センターに立ち寄り長期入院の子どもたちを励ます会が催された。ベラルーシ共和国の子どもたちにと、妻と息子（10歳と娘（8歳）が一生懸命に折ってくれた折り紙を託され持参いたしました。東海医療工学専門学校の学生諸君は、手品や風船を用いて子どもたちとの交流を図った。子どもたちの満面の笑顔を見ることで逆に訪問団の全員が安らぎを与えられたような気持ちになったのではないのでしょうか！！

医療機器の使用実態調査

今回の渡航目的は、チエチエルスク地区病院とベトカ地区病院において医療機器の使用実態調査を行うことである。機器リストを元に、納入機器名

の照合や形式の調査、設置場所や動作確認およびマニュアルの有無や消耗品の納入経路などを確認し、チェックリストに記載し、また不備な取り扱いに対する使用上の問題点をあらいだし使用方法の指導をおこなった。

チエチエルスク地区病院においては、日本のODAから超音波診断装置、脳血流計、保育器、分娩監視装置、手術器具、血液凝固検査機器、エンドスコープなどが寄贈されていた。本JIC



ベトカ地区病院にて



(左から) 瓦谷さん、廣浦さん、ベトカ地区病院院長、在ベラルーシ小池大使

Fからも血圧心電監視装置(4台)と心電計(2台)が寄贈されており、これらの機器を学生諸君がチェックリストに沿って確認し動作点検の確認を行ってくれた。ファイバースコープの取り扱いやコード類の管理に不備を認めた改善点を明確にし指導をおこなった。

ベトカ地区病院の本院においては、

モニターとシリンジポンプ各3台がICUに設置されており、心電計、パルスオキシメーター、ファイバースコープ、吸引器、除細動器も同一フロアーに整備されていた。実際に使用されている状況であり、スタッフの理解度が良く問題なく使用されていた。ベトカ地区病院の分院に設置された超音波診断装置においては心臓、腹部、子宮(胎児)など年間5000例の診断がなされている。しかし、甲状腺などの診断に関しては古い装置で行われていたため超音波診断装置の需要の多さと必要性の高さを再認識した。また、心電計、オーディオメーターにおいても使用頻度が高かった。ベトカ地区病院の診療所においては、除細動器のバッテリーが放電されてしまっている状態で、電源コードがロッカーに締まってある状態であったため、取り扱いの使用方法と共に管理の仕方を指導おこなった。

ME機器使用の人材育成の協力体制を

今回の2施設の地区病院における支援供給は、総合的には十分に機能し円滑な運用がされていたと思われる。しかし、これらのME機器を使用できる人材が各1名しかない現状であり、今後人材育成の部分での協力体制が必要であると思われる。また、故障時の対応は、ミンスクの公的機関であるメディカルテクニックスが行っているため、消耗品を含めたME機器の管理体制がベラルーシ共和国として構築されつつあるように感じとられた。地区病院としての役割は一般治療を行う機関としての目的を果たしているのだろうが、国立や州立病院への専門治療を必要とされる人々が3割以上もいる状況を考えてと患者搬送の問題点も考慮すべきであると思い、学生諸君と救急車の設備状態を確認した。しかし、救急車の中はストレッチャーがあるだけ

で他に全く設備がなく、日本の事を考えると想像もできない状況であった。

継続した活動を応援していきたい!

今回の訪問に際し在ベラルーシ共和国大使である小池孝行氏も同行していた。今後の医療支援についてJCFへの協力



ゴメリ環境センター院内学級で遊ぶ子どもと瓦谷さん

要請もしていた。日本から遠く離れているが、チェルノブイリ原子力発電所事故の被災国であるなしに関わらずこの地の子どもたちが健康で大きく成長できるような今後の支援活動の源とし継続した活動を応援していきたいと思っ

に立つ寝台夜行列車の中で、今回の渡航における自分たちの活動に対して満足な支援ができたのだろうかとの問いに、広浦氏から「言葉も違えば文化や風習も全く違う。だから100%は望めないんだ!!時間のかかる仕事だよ!!」と。

恩師の一言は、これまでの経験と今日までのご努力からの言葉であると思うと心に重く響きわたりました。

最後になりましたが、今回の渡航訪問でJCF関係者の方々には本当にお世話になりました。貴重な経験をさせていただきお礼申し上げます。

2006 年夏 スタディツアー

新たな世界の中で、新たな自分を発見！



ゴメリ環境センター院内学級の子どもと、スタディツアーに参加した東海医療工学専門学校学生

今回、スタディツアーに参加させて頂き、有難うございました。この9日間は、すごく短く感じられたけれど、人生の中で、とても貴重な体験でした。

初日は、中部国際空港からインチョン経由でモスクワに行きました。モスクワで感じたことは、少し肌寒くて冬はほんとに寒いところだなと思いました。モスクワのホテルは、すごく綺麗で三ツ星ホテル級でした。

2日目は、生まれて初めて寝台列車に乗りました。移動中列車の窓から目に飛び込んでくる広大な風景、牛、馬、国土の広さが私の心を揺れ動かせた。寝台列車は、ほんとに狭くて、ここで寝れるのか不安だったが、意外に

寝やすく驚きました。

3日目は、環境センターに行きました。そこは、現地ではとても大きくて、医療設備も整っていてとても綺麗でした。ここで私は苦手なマジックを披露しました。周りの子達が笑ってくれるのか心配で緊張ぎみだったけど、みんなが笑ってくれたのでホッとしました。

8月21日から3日間ベラルーシのチエチエルスク地区で周辺の病院を回りました。チエチエルスクの病院は医療設備が整っておらず、電気機器の配線などが剥き出し状態であり、医療機器の保存方法も確立していませんでした。でもこれから日本からの医療支援によってベラルーシの病院の医療設備が整い医療水準が上がっていくことが何よりの願いです。

チエチエルスクでは現地の人達と

もコミュニケーションを取ることができ、多大な経験をする事が出来ました。ほとんどロシア語を勉強していかなかった私にはコミュニケーションの面でかなり辛いものがあつた。英語を話しても多少通じるぐらいでリアクションやロシア語の本を片手にコミュニケーションを図りました。現地の人に自分の言いたいことが通じた時は凄く嬉しく感じた。全てが私にとって大切な思い出である。

観光することの出来たモスクワ。広大なチエチエルスクの自然には言葉が失った。しかしその背景にはチエルノブイリ原発事故。いろいろ考えさせられるスタディツアーでした。

今回、ベラルーシスタディツアーで経験することで得た新たな世界、その中で新たな自分を発見することが出来た。またひとつ大きく自分自身



機器チェックの準備をする菅君(右)

を成長させることが出来たと胸を張っている。医療支援という立場で参加させてもらったスタディツアーであったが、支援することにより自分の勉強にもなった。今回のツアーほど一度に様々なことを経験したことはなかっただろう。この経験を生かし、将来の自分に繋げていきたいと思う。

菅 直哉
(東海医療工学専門学校臨床工学科 2年)



ベラルーシ医療支援報告

昨年8月ベラルーシ共和国ゴメリ州チエチエルスク地区病院を訪問した。JCFは15年前に人口17000人の小さな街で子どもたちの甲状腺診断を始めた。手荷物で日本から支援した超音波診断装置が15年間働き続けていた。チエチエルスク地区病院は、大切に機材を扱って、たくさんの方々の甲状腺、胃、腎臓を診ていた。

今年の臨床工学技士の渡航と、技工養成の専門学校生たちのスタディツアーを兼ねて、今年8月18日〜26日、チエチエルスク地区病院の機器を総点検した。また、隣接しているベトカ地区にも、日本の外務省の草の根無償事業での医療機器が供与されている。

これらの機器のフォローアップと、それを元に、地区病院機能を整備していく事業の立案事業がJCFに委託される運びとなった。

ベトカ地区は、チエチエルスク地区以上に高汚染地域が広がっている。畑地が広がるのどかな地域である。映画の撮影時にずっと通っていたが、今回初めて地区病院を訪問した。

リュドミラ院長は、明るく活発な方で「私はここで生まれ、ここで育ちました。事故直後は汚染がひどく、病院の敷地も土壌が掘り返されたんですよ。でも、見てください。花壇は病院のスタッフが、皆で育ててきたんです。私は、ベトカの地が好きなんです。だから、皆でこの病院を良くしていきたいんです」と院内を案内してくれました。

松林に囲まれた病院は、サナトリウム（保養所）のように静かで落ち着いた環境にあった。花壇にはゼラニウム、アスター、サルビアの鮮やかな花々が咲き乱れている。20年前、放射能汚染

で掘り返された土地だと信じがたい。これが、20年の歳月だと熱い思いがこみ上げてくる。病院内は清潔に整頓されている。私たちと一緒に案内してくれる看護師さんも「院長が頑張るから、私たちもいつも一緒にやっているんです」と笑っている。リュドミラ院長は、地域の患者さんを丁寧に診ていきたい、設備を整えながら、病院経営のマネージメントを学ぼうとミンスクの経営講座で学んでいるそうである。

地区病院の初期診断の充実を図りながら、これまで同様、州立病院、環境センター、小児血液センターの血液疾患の子どもたちへの治療アドバイスを継続していく。JCFの活動も15年を経たからできる人間関係と信頼の輪がある。

それぞれの分野での専門性を生かしながら、JCFならではの協力関係を田舎の地区病院に向けていく動きが始まった。

（事務局・神谷）



モスクワ祭り



9月2日、土曜日、モスクワの大きなお祭り—都市生誕の日—がありました。今年モスクワは859年を祝いました。このお祭りは毎年9月の最終週に行われますが、今年は、大切なリハーサルとしてみなされます。2007年は、モスクワ建都860年に当たります。

街では、3000以上の文化行事が行われました。コンサート、コンクール、展覧会。数十のコンサート広場が広がり、いくつかの中央通りは、歩行者天国になりました。この日、モスクワの通りは22万人の人々であふれました。中心地でお祭りが始まると、モスクワ市長、ロシア大統領、ロシア正教会の大司祭が、お祭りを祝う挨拶を述べます。赤の広場では、数千人の学生達が、独自の若者の催しを繰り広げます。

モスクワではこの頃、特に、赤の広場、モスクワ大学で、新婚夫婦が目にとまります。生誕の日には、さらに、この年金婚式を迎えた人々を祝います。

特別なパレードが行進します。昔モスクワの自動車工場で生産された旧式の「モスクビッチ」のパレードです。都市生誕祭に向けて、モスクワ市民にすばらしい贈り物がありました。ビジネスセンター<モスクワ シティ>に新しい地下鉄駅がオープンしたのです。

お祭りの最も華やかな催しは、クレムリン宮殿対岸の花火とレーザショーです。

モスクワっ子と観光客の安全のために、町の通りを15000人の警官が警備しました。

彼らは、自らの職務を果たし、モスクワっ子をがっかりさせることはありませんでした。

イリーナ・ニコラエワ (JCF モスクワ事務局)



こんにちはペラルーシ
カ丸 邦子

『今年のペラルーシは参加できなくなりました。残念でなりません』と、手紙を添えて東海医療工学専門学校の江島徹君から色紙が届きました。『元氣』『光』『夢』『愛』：エコセンターの子どもたちへのメッセージが墨で黒々と書かれてありました。廣浦先生の生徒さんたちは実に律儀です。できる限り良い形で子どもたちに渡したい旨をお礼状に書いて私は成田を発ちました。

ミンスク空港からゴメリ迄の道路は整備拡張されてたいへんきれいになっていて、風景もすっかり変わっていました。以前衝撃を受けた森や、小鳥の巣箱、放射能のマークが着けられた四角いコンクリートはどこに行ってしまったのか。見渡してもただ大地が続くばかり。所々出会った森は、きれいな休憩所が設置されていました。人家が近くなると道端で、リングやトマト、花をバケツに入れて売っている元気のいい子どもの姿が見えました。

——私の知っている子どもたちも、こうして物売をしたのだろうか——

エコセンター院内学級初日。去年も、前の年も、その前も、入院していた子どもたちは本当に子どもで、大きくてもせ

いぜい15歳だった。ところが今年は17歳が多い。小さな子もいて年齢差が大きい。予定してきたカリキュラムの内容は小さい子向けだ。さて、どうするか。今回主軸に、絵本《はらぺこあおむし》をロシア語と日本語の両方で表情をもって読むことを据えてのプラン。イリーナさんのロシア語訳はかわいらしくて、楽しくて、とってもいい！だから表情豊かに読み交わしたい。そこで「明日からしばらくの間、この絵本を通して私はロシア語を覚え、みなさんには日本語を覚えていただきたい」と話すと、「待っています」とやさしい反応をみせてくれた。帰り際に病棟の事務室にすべての教材を預かって欲しい旨をイリーナさんを通じてお願いする。それは、この先、ホテルとエコセンターの間をひとりでバスで通うので手荷物は少なくしておきたかったのです。で、何故か絵本だけは口語・和語2冊自分分で：と手元に残したのです。

——ターニヤ、ゴメリの私の娘です。大学2年生。彼女とその家族は、クニコサンがゴメリに来た日は我家の祝日だと言って歓迎してくれ、アルバイトのない日は彼女がエコセンターにつき合ってくれた。ホテル前から、トロリーバスなら20番、バスなら12番に乗ってジパで降り、そこで

30番か18番のバスに乗り換えてエコセンター終点。行き方もわかりやすく教えてくれました。アルバイトに支障のないよう「ムリしないでね」と言うと、彼女は「多少ムリをしてもその事が嬉しいのだから気の済むように案内させて」と、にこやかに言ってくれた。

2日目、ターニヤとその朝ブレストスカヤから今年もまた夜汽車で会いに来てくれたターニヤと三人でバスを乗り継いでエコセンターへ行く。事務室で声をかけ預けておいた荷物を手にしてびっくりした。ほとんど消えていた。「こんな筈はない。もっとたくさんあった筈です。アレにコレに：」「いいえ、私が預かったのはこれだけです」こんな問答が続いて……。何か勘違いしたのでしよう。どうやらいい物だけ職員で分け合ってしまったようでした。残っていたものは、たかさんの新聞紙、折り込み広告、25枚入り折り紙一袋、ガムテープ、そして江島さんからの色紙、だけでした。大きさもちょうど良いくいい色ばかりの100枚入りの折り紙も、シャボン玉も、クレヨンも、セロテープも、のりも、はさみも、マジックインクも——みんな、みんな、あゝ！！今回のツアー第一陣で参加した渡辺加奈子さんが「使ってください」と、私物の筆ペン、のり、はさみの

入った小物入れを残していつてくれました。大助かりで最後の最後の日まで役立ってくれました。子どもたちは教材が失くなってしまった様子をずっと見ていたのでいつも協力的でした。子どもっぽいと思われるような手遊びも歌も楽しんでくれました。遊びも歌もみんな日本語でした。簡単なだけに繰返しが多く、ことばを覚えるのにはちょうどいい。数字もイチ、二、サン…と遊びながら覚えてゆきました。江島さんからの色紙に日本語よみとロシア語よみを書いてガムテープで部屋中に貼りました。『夢・COH・10M3』『ソソ・ユメ』『みんな声に出して読み合い、覚える』とさらにあ



「はらべこ青虫」の絵本を読む力丸さん（左）

れは日本語で何と言うのか。これは何と言うのか。と積極的に聞いてきました。残念だったのは、協力的だったほとんどの人—17歳を中心に—が5日目に退院してしまったことです。

絵本の読み合わせも「ゆっくり、ゆっくり」と囁くとゆっくり読んで一日ごとに表情が出てきました。「日本語で読みたい」と希望する人も増えました。特にワリーヤという12歳の少女は「あお虫はお腹が痛くて泣きました」と読む時は、自分も泣きそうな顔になるのです。

絵本の最初のページに大きなお月さまが描かれています。「お月さま」と指差して言う「オツキサマ」とおうむ返しにみんなが言います。「日本では、お月さまに兎が住んでいると言われています」と《月のうさぎ》の話をしてみました。手ぶり身ぶり、辞書を引き引き。話し終えると、なんと、拍手をしてくれました。「あなたの話はやさしい」と笑顔を見せてくれたのです。

——ワリーヤ。大きな眼の聡明な少女。この子の積極さにどれほど助けられたことか。少女は言いました。「私たちにもバーバヤガーが出て来たりする楽しいお話がたくさんあるけれど、あなたのお話のように、やさしくて美

しいお話しは知らなかったわ。私は三ヶ月も入院していたの。とても淋しかった。あなたがもつと早く私たちの所に来てくれたらよかったのに」そう言つて、さらに「今日、退院するからこれから一緒に私の家に行きましよう」と言い出した。一緒に行けないと告げると、走って自分の部屋に戻りノートを持ってくると「いつでもベラルーシに来たら訪ねてネ」と短い手紙と自分の住所を書いて私に渡した。その手紙には「長い夏の間、子どもたちは、あなたのような助けを必要としていた。あなたは子どもたちを助け希望をもたせてくれた。ありがとう。病院を訪ねてくれてありがとう。私は忘れない」と書いてあった。12歳の少女の手紙です。日本に帰ってからこの手紙を読んだ私は、自分がどう受け容れられていたのかを初めて知りました。ワリーヤのようすを見ていたからか、その後退院してゆく人たちは自分の住所を渡してゆくようになりました。写真ができたらひとりひとりに送ろう。

——いろいろ紙やはさみ、のり等を買おうとバスを途中下車して何軒か本屋を覗く。ホテルに近い本屋さんが一番対応がよかった。見ぶり手振りで話す私に真剣に向き合ってくれ、6色2枚組のいろ紙10組と文房具が買えた。本屋さん

で絵本を見つけた。去年までは店頭には絵本はなかった気がする。絵本といっても昔、私が遊んだぬり絵帳のような薄っぺらな物だけだ。そんな小さな事にもゴメリが変わろうとしていると感じた。ホテルに帰っている紙の半数を正方形に切り揃える。切り端は明日、小さい子たちに輪つなぎを作ってもらおう。

入退院が激しく毎日顔ぶれが変わる。這い這いの子、よちよち歩きの子、7歳の子、10歳、12歳、14歳、17歳、賑やかです。気をつけないと柔らかな手や足を踏んでしまいそう。コースチャ―は体当たりする。「おお、上手に歩けたねえ」と、コースチャ―に話しかけながら、子どもたちに紙の折り方を説明する。机の上に広げられた新聞広告を見て、何ができるかを見つめている。紙ヒコーキができると大喜びで作り、飛ばし合う。「小さい子にぶつからないように気をつけて！」と幾度も声を張りあげる。小さなジーマ7歳とボーリエス7歳は自分では折らず、できた物だけを欲しがる。サーシャ14歳は自慢げにいくつも作って飛ばしてやる。そのうち「これは日本式。今からロシア式を作る。どっちの方がよく飛ばるか。」と夢中。紙ヒコーキ、紙デッポウと広告も大活躍。新聞紙も帽子になったり、動物

の尻尾になったり。

日曜日、新しい顔があった。セルゲイ15歳。ボーバ11歳。男の子が多い。そしてこの日から空気が変わった。リョーシヤ15歳は最初からいた子。けれど小さい子たちにちよっかいを出したり、邪魔をしたり、みんなの中に入ろうとしない。声をかけるとフンと横を向いたりして拗ねてみせる。が、17歳の人たちに何か言われるとシブシブ手を出すといった具合。ところがこの日から17歳は3日目に入院してきたマキシム一人になったこともあってか、リョーシヤは男の子たちをまとめ始めた。何かやろうとすると「オイ」と声をかけ、合図をしてやらせない。邪魔をする。セルゲイもボーバもサーシヤも私に気をつかいながらもリョーシヤに従い騒いでみせる。ただ、初めからいたジーマ15歳は、どんなに声をかけられても一緒に動くことはなかった。リョーシヤ率いる少年団は日ごとに堂々と邪魔をするようになった。そして私の反応を窺った。やりにくくない訳はないが、私は努めてみんなに同じに接した。

——エレーナ医師は回診の後、ブレイルームに来てはゞ機嫌いかが？きれいな物を作って、子どもたちは楽し

んでいます。ありがとうと、にこやかに声をかけてくださる。いつもは不機嫌な顔を見せる職員もエレーナ先生と一緒にの時は笑顔を作ってみせる。そして、何日目だったか、私の荷物（と言うほど大事な物はなにもなかったが）紙袋はエレーナ先生の部屋で預かってくれるようになった。すると不思議なことにシャボン玉がひとつ返されていたり、ボールペンが3本戻っていたりした。

切り紙をした。切り方だけでなく折り方によっても模様が異なることを知ると、ひとりで何枚も切っては楽しんだ。黒や茶、灰色なども意外な色と組み合わせ



スタディツアー参加の学生も一緒にお習字

素晴らしい色彩感覚を発揮した。ほんとうに素晴らしかった。紙を切りながら子どもたちはフンフン歌っている。聞いていると、私が唄った歌らしい。マキシムとオーリヤが携帯電話に撮って、私が帰った後にみんな聴いて覚えたという。私も聴かせてもらった。世界の便利さはゴメリにも根をおろしたようです。

絵本の読み合わせは続いていた。途中、冷やかしゃ茶々が入っても向き合ってくれる子は上達した。が、所かまわず鳴る携帯電話には閉口した。メロディが鳴ると途中でもオーリヤは出て行ってしまう。落ち着かない。さらに乳幼児に付き添っている若い母親たちは11時になると「ナースチャー」と、少女を呼んで何か耳打ちしてドアを閉めて出て行ってしまう。ナースチャーは小さい子たちが出て行かないように、泣かないように面倒を見ながら絵本やプログラムに加わっている。どうやらナースチャーに子どもを預けて自分たちはタバコやお茶に行っているようだ。ナースチャー12歳は最初からいた子でよく手伝ってくれる。少女の健気さを見ていると胸が熱くなる。

その日私は、医療チームのみなさんと一緒にベトカに行

こうと予定していた。明日休みますと告げなくては、と片付けながら思っていると、先に子どもたちから声がかかった。『また明日！』と。返事をするのにちよつと間があった。すると「日本人（医療チーム）が来たから明日帰るの？」と聞く。顔を上げるとみんながじつと見ていた。少年団も見ていた。息をひそめて。部屋はシーンとしていた。「まだ帰らないよ。また明日」そう答えると、とたんに騒々しくなった。明日のベトカ行きはキャンセルしよう。

ベトカ行きを止めて18番のバスで病院へ行く。「おはよう」と入って行くと、子どもたちは集まっていた。少年団はトランプをしていた。マキシムは点滴が始まっていた。「さあ始めましょう」と声をかけるが、トランプをやめない。二度三度声をかけたが聞こえないふりをしていて止めた。絵本を読んできらきょうはちぎり絵をしようと言った。机はひとつしかないでトランプを止めてないと机が使えない。もう一度、机を使いたいののでトランプを止めて欲しいと話す。リョーシヤは下から睨むように私を見た。少年団はヘラヘラ笑っている。ナースチャーがグニコサンが困っているでしょ、カードは止めて！と抗議してくれた。するとボーバが肘でナースチャーを突いた。セルゲ

イが「どけよ」と言わんばかりにナースチャーの手を払った。見る見るナースチャーの大きな目から涙が落ちた。「おナースチャー」と彼女を抱きしめてから「他の場所で行って」と、静かに言う。ヘラヘラして聞こえないよおとばかり。「この部屋を出なさい」と指でドアを示した。静かな言い方だがキツとした顔をすると思いたのか、手を止めた。もう一度静かに「出なさい」。少年団すすご出て行った。みんなでもあくるくなって大きな大きなあじさいの絵を描いて、そこにいろ紙をちぎって貼ってゆく。少年団は気になるのか、まず、ボーバが偵察に来た。次いでセルゲイ。二人共ガラス越しに覗いて走って戻る。しばらくしてサーシャが来た。彼は堂々と入って来てしばらく見ていたが黙っていられず、口を挟み、手を出して夢中になってしまった。私は気づかない振りをして「サーシャはいないね。おもしろい事をしているのに。サーシャはいないね」と探す素振りをする。サーシャはえつという顔をして自分を指差して「オレ、ここにいます」と示す。まだ気づかない振りをして、いるうちにみんなで笑ってしまった。誰かが歌い出した「ウミハヒロイナオキイナ……メロディだけがフンフンと広がった。そのうちボーバもセルゲイも入って来て一緒にやっていた。気がついたらリョーシャが隣に座っていた。



子ども達への説明は身振り手振りで

心晴れないこともあるよね、リョーシャ。

帰ろうとバス停に行くときジーマがいた。「ジーマ家に帰るの？」と声をかけると彼はうなづいた。女の子のようによさしい顔をして、あまり話さない子だったけれど少年団に入らず、ずっと協力してくれた。芯の強い子なのでしょう。傍にいた母親にジーマが小声で何か言うと、母親は「ありがと」とベンチから立って挨拶した。「元気でね」と言うと耳まで真っ赤にして笑いながら下を向いて、小さな荷物を持って駆行きのバスに乗った。さようなら。

——誰が戻してくれたのだろう。その日の朝、荷物の中に和紙と染め物用の染料が5本だけ入っていた。これは養護学校の香里先生が子どもたちに楽しんでもらったさいと用意してくれた教材。うれしかった。5色だけでもいい、明日みんなで染めよう。けれど染料を溶かす容器は戻っていない。バスを途中下車して方々のお店を覗いて容器を探す。デパートにも行ったが適当な物がない。透明でそれなりに大きい、何かないかと歩きながら考えた。あっ!! クバス!! クバスはロシア独特のまっ黒い飲み物。ゴメリの人たちはよく飲んでる。クバスの容器なら透明で生じ

ールの小ジョッキ位の大きさだ。良い物を見つけたと、ホテルを素通りしてバザールに急ぐ。クバス売りの娘さんに頼んでみる。「クバスはいらない。容器だけが欲しい」と。彼女は「本当にクバスは要らないのか」とくり返し聞いた。そして「わかった」と快く応じてくれた。5つで約10円。交渉成立。

最後の日、みんなで和紙の染め物をする。ジワジワと色が染みてゆき紙を広げるときれいな幾何模様ができていて声を上げて喜んだ。染めた紙を広げた新聞紙で乾かす。何回も飽きることなく染めていた。みんなが和やかだった。「きょうはこれで終りにしましょう」と声をかけ片付け始めるとセルゲイが明るい顔で「ここでトラブしてもいい？」と聞いた。「どうぞ」。みんなの邪魔にならないように場所を選んで始めた。「明日は日本人が多勢で来ます」と告げて帰って来た。

ことばのわからない国に来て不思議なくらい、違和感も不安も覚えなかった。それはゴメリの人たちが気づかってくださったお陰です。私が困らないように、淋しくならなようにと家族中で、中には親戚も一緒にホテルに会いに



「見て、見て！」一生懸命バルーンプレイに挑戦する子どもと

来てくれたり、たびたび電話をくれた家族、家にいらつしやいと迎えに来てくれた家族、ソーシ川の船遊びに誘ってくれた家族。見ぶり手ぶり辞書を引きながらたくさんおしやべりもしたし、大きな声で笑いもした。JCFと縁りの深いアナトリーさんまでもが何かあったらアナトリーさんで電話しなさいと電話番号をノートに書いてくださった。その時はありがたくて少し泣いてしまいました。こんなにも、こんなにも多くの人たちが心を寄せ、守ってくださったから楽な気持ちで過ごせたのです。ありがたかったのに、どの人にもきちんと、充分なお礼を言えなかったことが悔やまれます。

最後の、本当に最後の日、医療チームのみなさんと一緒にエコセンターに行く。子どもたちはイスを並べて待っていた。絵本を読み交わす。ロシア語はマキシムが読んだ。彼は声がいいのでおはなしに深み加わる。日本語はナーズチャー。かわいらしく表情豊かに読んだ。聞いているうちにワリーヤの声がそこに重なった。学生さんたちに風船やランプの手品、けん玉、ヨーヨー等で遊んでもらう。小さいジーマとボーリエスは最後まで何でも欲張ってひとり占めしていた。手品やけん玉が上手にできると「見て見

て」と少年団は見せに来た。どの人も喜んだ。遊びがおさまった所で別れを伝える。「一日も早く家族と暮らせる日の来ることを祈っています。長い間ありがとう。ツツとマキシムが立ち上がって来て私の名前を呼んだ。握手をと手を差し出した私の肩をマキシムは大きく包んだ。『ありがとう』そう言うてからイリーナさんに向かって失礼でなかったら手紙を出したいのですが住所を教えてくださいませんか』と聞いてくださいと頼んだ。答えは「もちろん」。マキシムは急いで部屋に戻りノートを持って来た。私は大きな字で住所を書いて渡した。もし、マキシムから手紙が届いたら、たくさん協力してくれてありがとうとお礼を言う。

私はいま、教材が消えてしまったことをよかったと思っています。二日間くらいは、あれがあったら…、と未練がましく思いましたが、月のうさぎの話聞いてもらった時に、ただたどしい語りでも通じた。これがあるじゃないか。日本の歌もあるじゃないか。それが本当の交流だよ、と原点に戻れた気がしました。必要があるならばゴメリで探せばいい。それで間に合う。大仰に日本から持ち込むことはないんだ、と。物がないからこそ生まれたアイディア

も工夫もあった。要はどう関わられたか、お互いの心の中に何が生まれ、何が残ったか、そこを覚えていたい。ブレイルームを後にして、これで終った。とも淋しいとも思いませんでした。また2、3日して「みんなおはよう」とあの部屋に入って行きそうな気がしていましたから。事情の呑み込めないジーマやボーリエス、小さい人たちは今も待っているかもしれない。私の心がそこに残っている限り、待っているかもしれない。



～チェルノブイリからのメッセージ～

小室等と鎌田實のライブ&トークセッション



諏訪中央病院看護専門学校
学生自治会講演会係一同

私たちに出来ることは
何であるのか：：

さる9月17日、第4回諏訪看祭（諏訪中央病院看護専門学校学生自治会主催）を開催いたしました。

当校では、自治会の方針をもとに、毎年テーマを掲げています。それを本年度の文化祭では「チャレンジした人の話を聞くことにより、チャレンジ精神を身につける」とし、ボランティア活動を含む様々な活動に参加してきた方のお話を聞くことにより、私たちは世の中に対して何が出来るかを問いたくと思いました。そこで、チェルノブイリ原発事故後20年である今年、その事実を風化させないためにも、今なお事故後の影響を受け続けている現地の状況や、現地への支援活動の実際を知りたいと考えました。

私たちはその時、音楽の世界を通して現地との交流を図り、チェルノブ

イリドキュメンタリー映画の音楽を担当された小室等さんの存在を知り、是非小室さんの歌とお話を聞きたいと思いました。それから数日後、鎌田先生を通じて、依頼させていただいたところ、快く引き受けて下さり、今回の講演会が実現しました。

悪戦苦闘の資料作り

当校は、高等学校や大学を卒業後すぐに進学した学生から、様々な人生を経験してから再度学校へ入学した30代、40代の学生がいます。そこには、当然のことながらチェルノブイリ原発事故が起こった当時は生まれたばかり、あるいは、生まれていなかった学生も含まれています。そのため、チェルノブイリ原発事故を全く知らない世代にも分かりやすい資料にしたいと思い、原子力発電とは何か：から考えていく事にしました。

しかし、チェルノブイリの関連資

料はこの20年で膨大な量に達し、どの記事をどう使えば、分かりやすくなるのか、四苦八苦しました。その度に、投げ出したくなる気持ちを抑え、チェルノブイリでの教訓を語り継ぎ、二度と繰り返さないためにも：と仲間と支えあいました。

そして、まずは当校学生に興味を持つてもらえるようにとの願いから、JCFからお借りした資料や看護師である当校教員が実際にチェルノブイリに行った際の体験談をまとめ、全校で事前学習を行いました。この時、文章だけではなく、JCFからお借りした写真パネルを校内に掲載したことで、多くの学生の注目を集める事が出来ました。

そのような試行錯誤を重ねる事で、学生の中に、今まで漠然としたイメージしかなかった現地の様子が、少しずつリアルなものとしてとらえられるようになり、学習を深められたと思います

した。その輪を一般の方々へ広げる為に、当日は玄関先から会場に向かうまでの間に『チェルノブイリ写真展』を開催いたしました。

あたたかな連鎖

講演会は、鎌田先生によるチェルノブイリ原発事故後の様子と現地の説明（パワーポイント使用）、小室さんライブ、



みんなで作くりあげた「ライブ&トークセッション」が始まります

お二人の対談、質疑応答の四部構成で行いました。

冒頭から衝撃的な映像と、その中でも笑顔一杯に現地で生活されている方々の様子を鎌田先生が話す中、なんともいえない静寂な雰囲気漂っていました。その後、小室さんの現地での情景が思い浮かぶような語りと歌に、誰もが聞き入り、魅了されていました。

小室さんは当初、鎌田先生と一緒にチエルノブイリへ行こうと誘われ、大変躊躇されたとの事でした。なぜなら“医療従事者ならまだしも、僕は何の役にも立たない。”と感じ、また、その裏には、放射能で汚染されている現地へ行くのが怖いという気持ちが隠されていたとの事でした。しかし、とうとう断りきれずに、2度訪問し、“医療的なサポートばかりでなく、文化的な交流を通じて心の交流を図ることも出来る”という気持ちに変化していった様子を、私たちに大変わかりやすく

語ってくださいました。小室さんは、現地の方々と言語の壁を越えた心のふれあい、ぬくもりに感動された様子が、その優しい、大らかなお人柄から、ひしひしと私たちに伝わってきました。

“あたたかなことは、あたたかな連鎖を生む”これは、まさしく私たちの日常生活の中で、ほんの小さな思いやりから生まれることです。命の尊さに国境はありません。今日、日本でも子供が巻き込まれる悲惨な事件・事故が多発している中、命の尊厳をより多くの人々が考え、優しさをもって人と関われていけたら…あたたかな連鎖は身近なところから始められると感じました。

芽生えた気持ち

講演会を終えて、会場の方々から沢山のご感想をいただきました。その一部を紹介します。

たい：。私たちのチャレンジ精神は、今はまだ芽生えたばかりです。しかし、いつか必ず大輪の花を咲かせ、社会貢献をしていきたいと、深く胸に刻み込みました。

ました。
・命について、生きることについて、唯一考えることの出来る動物である人間が、人を殺したり戦争をしたり…。情けないことです。今の私に何が出来るとか考えたいと思います。

・知らなかった世界の現状を知ることができました。原子力発電所の爆発による被曝という悲惨な状況の中にあっても力強く生きていくとする人々、生きたい、生きて欲しいという気持ちが伝わってきて、人の暖かさが感じられ、とても感動しました。

人間ひとりの力は、もしかしたら小さいものなのかも知れません。しかし、ひとりひとりがもっている力が集結した時こそ、大きな力が生まれます。それを平和活動に有効に利用していき



パワーポイントを使った鎌田先生のお話

・改めて、自分自身が世の中に対して、何かできる力があるのかを考えさせられました。今日、この瞬間だけ気持ちを新たにすることはなく、いかに長く思い行動し続けるか。それが大切であると気付く

第5回JIM—NET会議

イラク子どもたちの白血病治療支援



イラクを出国し、隣国のアンマンで治療を続けている子ども達がいる。一人ひとりの子ども達に向き合っていると、なぜここに来なければならなかったか、社会の治安、医療、学校…さまざまな状況が見えてくる。

ベールの食卓

雨後の軍団

朝夕の気温が下がってきて、森が湿気をはらんでくる。ナラやカシが黄金色に変わっていく季節。

一雨後の森は格別だ。熟した木の実、柔らかい腐葉土の芳醇なおいが、明るく乾いた秋の陽の中で豊かな時を告げている。ステパンじいさんは、さっそく準備を始める。小さなナイフと柳の籠、使い込んだ布の袋に食料を放り込んだ。ステパンさんの後を付いていくと次々にキノコの軍団に会う。後ろからついていくだけでは、キノコ取りができないと、分かれて、落ち葉の中に目を凝らす。赤や白、「ヘイホー、ヘイホー！」と小びと達が、出てきそうなかわいい毒キノコ達もいっぱいだ。

これなら、と食せそうな色合いでキノコを選んで、集めていった。しかし、ステパンさんの眼力は、キノコを見つけることではなかった。得意げにみせた私の籠は、結局からっぽにされてしまったのだ。キノコ名人は、食べられるキノコをたくさん見つける人、と思い知る。

森の出口で、焚き火をたき、持っていった黒パンにサラ（豚の脂身の塩漬け）の滴りをつけて食べた。黒パンにも秋の香りがのっていた。

◎キノコ・野菜ソース添え白身魚

<材料>

白身魚 800g、ニンジン 2本、オランダセロリ 2本、キノコ 300g、
植物油 大さじ4、サワークリーム 大さじ4、トマトピューレ 大さじ1、
レモン 大さじ1、みじん切り香草 大さじ1

<作り方>

1. ニンジン、セロリを細く千切りにし、キノコを割いて、植物油で炒める。
2. 水を少々いれ、弱火にかける。
3. 白身の魚を一口大に切り、塩とレモン汁をかける。
4. 火を入れた平なべに、魚を並べ、炒めた野菜とキノコをのせる。
5. トマトピューレとサワークリームを混ぜ合わせ、注ぐ。
6. 魚に火が通ったら、香草のみじん切りを散らして、食卓に出す。

治安悪化の中で 踏みとどまる医師に支援の継続を！

井下 俊（JIM-NETコーディネーター）



アンマン会議に出席したイラク医師

9月20日JIM-NET第5回アンマン会議が開かれました。日本から医師3名看護師1名、そして関係団体から6名、JICAから1名が参加。イラクからは医師5名、JIM-NETのローカルスタッフ1名。合計17名の参加になりました。井下医師（JIM-NET）から会議について報告をします。

今回の会議で下記の今後の援助計画が決定された。ここでは、個々の項目について当日の討議内容を踏まえて報告する。

- 1 緊急薬剤および感染予防物品の配給
4つの病院に総額毎月300万円相当を目標
- 2 G-CSFの配給
成分採血装置の必要物品の配給
CTHに3ヶ月で72セット
- 3 モスル血液バンクに必要物品の配給
医師研修（バグダッド中央教育病院）
医療機器
- 4 血液震蕩機
血液培養セット
（バグダッド血液バンク、バスラ）
（バグダッド中央教育病院）
- 5 成分採血装置（バスラ）
臍帯血（さいたいけつ）バンク設立へ向けて
人間の安全保障基金を使ってイラクへのプロジェクトとして申請

- 6 バスラ院内学級の継続
- 7 経済的サポートの継続
- 8 スタディーの継続

1 緊急薬剤および 感染予防物品の配給

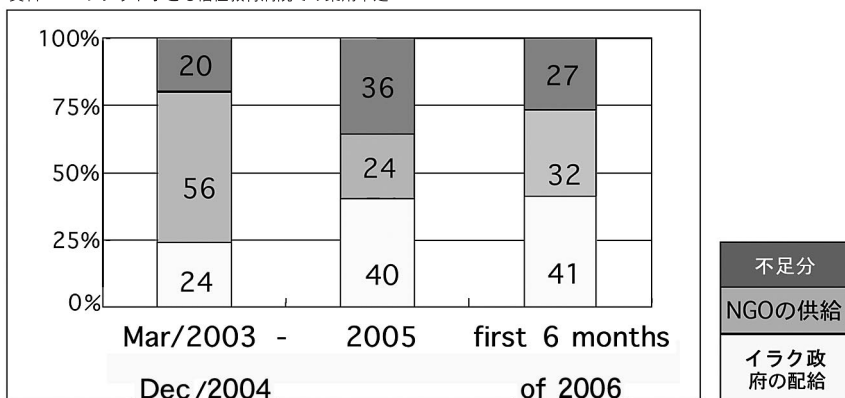
政府が十分機能せず治安の悪いイラクでは、依然政府からの薬剤供給は不安定な状態であると各病院の医師は報告していた。例えばモスルの医師は小児癌治療に必須の薬剤28品目のうち、イラク政府から支給されたのはわずか11品目のみであり、JIM-NETが17品目を配給した。またバグダッドの病院では、政府からの支給はわずかの改善は見られるものの、まだまだ需要量の40%程度にしか過ぎず、NGOからの支援を受けても不足分は27%に達していると報告した（資料1）。さらに両者で共通していたのは、JIM-NET

ET以外の海外NGOからの支援はほとんどなく、政府以外の供給源としてはJIM-NETが唯一と目立っている状態だということだった。

このように薬剤不足は、戦後3年たった現在でも深刻であり、確固とした政府機能が回復するまでは緊急的薬剤援助を継続しなければならず、かつ他の海外NGOの支給が見込めない現在ではさらに援助額を増額する必要があると考えられ、月々総額300万円くらいを目標に、緊急薬剤援助および感染予防物品の配給を行うことを決定した。

また、G-CSFはイラクでは血液腫瘍では原則として用いておらず、もっぱら他の固形癌の抗がん剤治療に用いているとのことであった。しかし、日本では悪性リンパ腫やリンパ性白血病の治療でも重症感染症時などには用いていることを説明した。イラク

資料1 バグダッド子ども福祉教育病院での薬剤不足



では治療開始後30日までに亡くなった急性リンパ性白血病患者11名中8名が感染症で亡くなっており（資料2）、こういった症例ではG-CSFで救命しえる可能性があることを説明し、今後JIMNETがG-CSFを配給してきたならば、積極的に血液腫瘍にも使用していくようコンセンサスが得られた。

2 成分採血装置の必要物品の配給

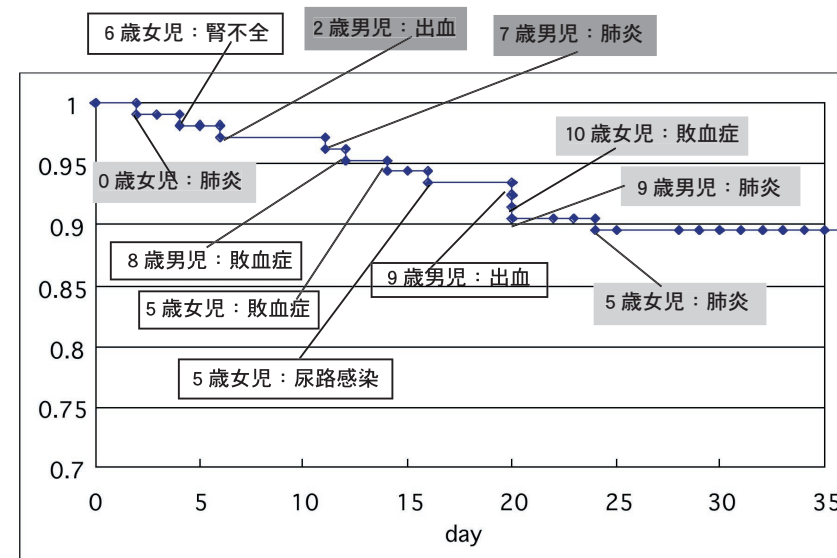
昨年10月にバグダッド中央こども病院に送り届けた成分採血装置が5月からイラク人医師により稼動し始めた。実際に病院内で献血者を募り、医師たちが成分採血装置を操作し血小板を得て救命しえた7例の症例が報告された。（左写真）

このように、いまだ血液バンクが

機能していないイラクでは、成分採血装置の病院への寄付により、今までは血小板が得られずに死亡するしかなかった症例のいくらかは救命できていると考えられる。しかし、採血時に必要な使い捨て回路がイラクでは手に入らず、これを継続的に支給しなければ成分採血装置が有効に働かないとバグダッドの医師たちは訴えていた。このため、消耗品の配給（3ヶ月毎に72セット分）をアンマンから継続して配給することを決定した。

また、モスルでは血液バンク内に2台の成分採血装置があるにもかかわらず、消耗品が手に入らないために、血小板採血ができない状態が続いていることがモスルの医師から報告された。使用している成分採血装置はバグダッドに送ったものと同じの製品であり、消耗品の型を確認後、同センターにも極力消耗品を送るよう努力することを計画している。

資料2 治療早期での死亡症例 イラク3病院計111名の急性リンパ性白血病患者の治療解析



縦軸は生存率、横軸は治療開始からの日数

バスラ母子病院の死亡例

バグダッド子供福祉教育病院の死亡例

バグダッド中央こども病院の死亡例

3 医師研修

昨年春から現在まで、看護師・検査技師および癌専門医の研修をアンマンのキングフセインがんセンター（KHCC）の協力を得て行ってきた。どの病院からも研修の続行、特に看護師研修の要望が強かったが、次のような問題のため再考することになった。

ひとつはヨルダン入国の難しさである。ヨルダンはテロ対策のためイラクからの入国を大幅に制限しており、たとえ研修目的の入国で書類に不備がなくともランダムに入国拒否される傾向にある。実際にJIMNETが招待した看護師2名が入国拒否され（うち1名はビザに問題あり）、1名の医師が入国拒否されそうになった。若い看護師を研修に招待しても、うち何名かは入国拒否される危険があり、1度入国拒否にあった人物は今後もヨル



成分採血装置を使ってドナーから血小板を採取するバグダッド医師

ダンの入国が困難になる可能性がある。また飛行機代が無駄になる可能性があるため研修は困難と判断した。

もうひとつは看護師研修の効果が不十分であると考えられるからだ。イラク人看護師は基礎的看護知識が乏しく、さらには英語能力・インターネットの能力が低く、レベルの高いKHCで研修しても効果が上がらないと判断された。また今まで研修を行った看護師の1名は病院内の事情により、小児癌治療とは無縁の部署に配属になったとのことで、研修をしても十分現地で活用されない可能性が高いと考えられた。

これらの理由より、JIMNETによる研修は一時中止とし、看護師研修はJICAなどによる基礎的研修に委ねることとした。ただし、協力関係にあるイラクの5病院のうち、唯一医師研修が施行出来ないCWTHの医師研修は、各病院の公平性から時期

を見て行うことを約束した。

4 医療機器

以下の医療機器を今後供給することを提案し受け入れられた。

成分採血装置1台（バスラ）
血液震蕩機（バグダッド血液センター）
血液培養セット（CWTH）

バグダッドに送った成分採血装置が無事に動き出したため、昨年の会議より約束していたもう1台の成分採血装置をバスラにも送付する準備を始めることを約束した。しかし残念ながら今回の会議では安全上の問題からバスラからの参加者はなかったため、今後メールなどでバスラの医師たちと相談しながら半年以内にバスラに1台送付できればと考えている。

成分採血装置で採取された血小板

は、採取後震蕩機で保存しておかなければ血小板が凝固してしまい、輸血しても効果が上がらなかったり発熱することがある。しかし現在のイラクの血液センターではこの装置がなく、血液センターから供給された血小板を使用しても効果の上がらないことがあり、この震蕩機を送って欲しいと以前より要望の強かった機器である。バグダッドとバスラの血液センターに1台ずつ送ることを考えている。

また、資料2で示したように死因の第一は感染症であるが、検査室の設備の問題から細菌培養しても信用に足る結果が出ないとバグダッド子ども福祉教育病院の医師が訴えていた。このため、細菌の混入がないよう検査が可能な簡易血液培養キットを同病院に送ることを考えている。

なお、HPAフィルター付の空気清浄機はバスラにはすでに送付したがまだ稼動していない。感染症予防

のためには同様の機器をバグダッドにも送付したいのだが、治安が改善していない現段階では安全に届く保証がなく、また運送料にも高額な料金が必要となるため、今回は見送ることとした。

3 臍帯血バンク

本年2月に日本に招待し、イラクでの臍帯血バンク設立の推進役になっていただいているイブラヒム先生から、治安上の問題から臍帯血バンクの話は6ヶ月待つて欲しいとの提案がなされた。

しかし、すでにJIMNET内で臍帯血バンク設立に向けた基金が成立しており、それに向けた準備としていかなる援助でも行うつもりであることイラク人医師たちに申し出た。例えば臍帯血中の幹細胞の量を調べるのに必要不可欠なフローサイトメトリーと

いう高額な医療機器は、白血病やリンパ腫の診断にも不可欠なものであり、現時点で臍帯血バンク設立が不可能であっても小児癌治療には有用な医療機器である。また、幹細胞を分離・貯蔵するような小さな研究室を病院内に持つことは、将来の医療技術の進歩に貢献することは確実である。そのようなものの受け入れ準備がイラク国内で可能であればいつでも考慮することを申し出たが、現在の治安情勢を鑑み、いずれの案も将来的な計画として保留することになった。

4 バスラ院内学級の継続

バスラ出身のイブラヒム先生はバスラ母子病院で院内学級を継続して行っており、子どもたちの描いたすばらしい絵を何枚もアンマンに届けてくれた。また、彼はバスラ内で購入可能な医療機器や薬剤の買い付けや、

後述の患者の経済的支援も行ってくれている。今後も彼の活動を支援していくことを約束した。

5 経済的サポートの継続

現在微々たる金額であるが、JIMNETではアンマンに治療に来たイラクの小児癌患者たちやイラク国内での患者の経済支援を行っている。主に交通費や宿泊費の支援であるが、これも不公平が出ないよう小額ずつ継続して行っていく予定である。

6 スタディーの継続

イラク国内の小児癌新規患者を登録し、その初期治療成績を解析しイラクでの治療の問題点を解明する目的で、本年3月から8月までスタディーを行った。なお、まだ不完全なデータのために、矛盾した数字がいくつかある（表1）。

バグダッド中央子ども教育病院（C T H）、バグダッド子ども福祉教育病院（C W T H）、バスラ母子病院（B a s r a h）、モスル・イブン・シナ病院（M o s u l）の4つの病院の協力を得、計199名の新規小児血液腫瘍患者が登録された。モスルでは担当医が約3ヶ月間エジプトでの研修を受けており完全な登録ができなかったが、その他の3病院からはほぼ新規患者を登録することができ、その治療成績を解析することができた。

新規小児血液腫瘍患者のうち約60%が急性リンパ性白血病（A L L）が占めていた。先進諸国では癌とはいえ小児のA L Lの完全治療率は80%を超えており、十分治療可能な疾患であるのだが、今までの会議の中で、経済的問題から治療を拒否もしくは早期に治療離脱する患者、薬の供給不足から治療が不完全に終わる患者、血液バンクの不備や感染予防の不備から治療早期の死

亡の多さなど、イラクでの小児癌治療の問題点が報告されていた。実際にそういった症例が何%くらい占め、それが先進諸国と比較してどれくらいの差があるのか数値として明らかにする目的でデータの十分得られたA L L患者計121名に関し解析を行った。

治療を拒否した症例は121例中9例で5.8%を占めていた。理由は主として経済的理由からであるが、2例ほどはあまりの幼さ（0歳児）に治療には耐えられないだろうとの家族の判断で治療を拒否した例もあった。治療施行できたのは112例（92.6%）でこのうち15例は患者状態の悪化から薬剤の減量や中止を行い、3例は患者家族の申し出（理由不明）により治療を中止していた。当初薬剤不足から治療が不完全に終わる症例がいくらか含まれるだろうと予想していたのだが、幸運なことにこの期間中A L Lに限ってはそ

ような症例はなかった。ただ、J I M—N E Tの薬剤支援がなかった場合どうなっていたかイラクの医師たちに聞くと、確実に治療ができなかった症例はでていただろうとのことであった。

治療後死亡したのは13例（11.6%）であり、うち11例が治療後30日以内になくなり、感染による死亡が半数以上を占めていた（資料2参照）。また治療により完全寛解に達したのは89例（80.2%）であった。

J I M—N E Tの支援の第一の目的は、この治療初期の死亡率を極力低くし、完全寛解率を高めるのが目的である。また、治療拒否症例が少なくなることも目標の一つである。この半年のスタディーで早期死亡率11.6%、完全寛解率80.2%、治療拒否症例5.8%という結果が得られた。今後もこのスタディーを続けていくことで、イラクでの小児がん治療の進歩とJ I M—N E Tの

表2 ALLの初期治療の施行率

寛解導入療法						
施行せず	2	3	4	0	9	
拒否		1	3	3	0	7
治療前死亡		1	0	1	0	2
施行	25	27	52	8	112	
		18	22	44	7	91
		7	3	8	0	18

表3 初期治療の結果

死亡（治療関連死）	6	5	2	2	7	6	0	0	15	13
感染		1		1		5		0		7
出血		1		1		1		0		3
感染と出血		3		0		0		0		3
他の原因による死亡		1		0		1		0		2
生存（治療拒否例も含む）	20		27		49		8		104	
完全寛解		18		23		43		5		89
部分寛解		1		0		0		0		1
反応せず		0		0		1		2		3
未評価		0		4		1		0		5

表1 この半年間の各病院における血液腫瘍の新規患者

	C T H	Basrah	C W T H	Mosul	計
計	41	50	98	10	199
A I	0	0	2	0	2
A L L	27	30	56	8	121
A M L	8	3	13	0	24
C M L	0	1	6	0	7
H L	1	3	7	0	11
N H L	5	13	14	2	34

AL；急性白血病、ALL；急性リンパ性白血病、AML；急性骨髄性白血病
CML；慢性骨髄性白血病、HL；ホジキンリンパ腫、NHL；非ホジキンリンパ腫



ルウェイシッド難民キャンプで検診する松澤医師

9月18日～26日、イラク医療支援のために、JCFから3名がJIM-NET構成団体として参加した。イラク国内は危険な状態にあり、アンマンまで出向いたドクター達のご苦労と熱意が伝わってきた。JCFから会議に参加した松澤医師からの報告です。

松澤 重行（小児科医師）

アンマン訪問団に参加して 小児科医の視点からの今後の課題

イラクでは国内の混乱がいつそう強まり、医師の仕事や市民生活にさまざまな危険や困難が生じている様子を聞き、予想をはるかに超える厳しさを

1 白血病の子どもに対する医療について

今回、私は、イラクの医師たちと小児白血病支援のための会議（アンマン会議）、イラク国境にあるノーマンズランドの難民キャンプ視察（ユニセフの医療視察に同行）、国境のルウェイシッド難民キャンプ（イラクからの難民）の子どもたちの健康診断、の3つの活動に参加しましたので、この場をお借りして、感想を交えてご報告させていただきますと思います。

このたびJCFの第5回アンマン訪問団の一員に入れていただき、貴重な経験をすることができました。ありがとうございました。

支援の効果が評価可能である。早期の死亡は7%以下、完全寛解率は85%以上、治療拒否は5%以下と目標設定を行い、今後もこのスタディーを協力して行っていくことが了承された。



アンマン会議参加者

最後に私的感想

イラクの政治状況は混沌とし、残念ながら治安状況は悪化の一途をたどっている。そればかりでなく、医師という社会的立場の高い人間は暗殺の対象にもなっていると聞く。そんな困難な状況の中でも、今回の会議に5名の医師が参加してくださった。週数回しか病院に行けなかったり、パンや日用品を購入するのも苦労しているらしい。モスルの医師は戦闘に巻き込まれ、車の中で息を潜めてじっとしていた経験もあるといった。

私がイラクの医師であれば、とくに海外に逃げ出していることだろう。「逃げないのか？怖くないのか？」と問うと、「死ぬときは、それが運命です。そこに患者がいるから逃げ出すわけにはいきません」と言っていた。頭の下がる思いだ。

正直言って今のイラクの状況を考え



現地の状況を説明するマゼン医師

ると、小児癌医療という分野への援助は費用対効果からいえば無駄な援助かもしれないと疑問に思うこともある。しかし、彼らがイラク内で医療を行う限り、小児がんに苦しむ患者がイラク国内にいる限り、たとえわずかで効果が十分でない援助であっても継続しなければならぬ。改めてそう感じた。

感じました。暴力行為だけでなく、知識階級や富裕家庭に対する脅迫などによって国内を混乱させようとする動きが目立っており、脅迫されて診療を止めざるを得ない医師もいるようです。しかし、このような自らも危険な状況の中で、日々の診療に懸命に努力されているイラク人医師たちには頭が下がりました。また、イラクの医師が自分たちの医療レベルや医療を取り巻く状況を把握し、私たちに對して支援を望むものとするでないものを区別している様子があり、信頼のおけるパートナーとして好感を持ちました。

会議では、病院ごとに、最近の状況（疾患ごとの患者数、治療状況、問題点など）、必要な支援について報告してもらい、これをもとにして討論を行って、今後6か月の支援内容を確認しました。イラクの病院の小児血液腫瘍診療において抗腫瘍薬の使用量の半数近くがJIM-NETによって支援

されている、との報告を聞き、国内の医療・保健行政の混乱を実感するとともに、JIM-NETの重要性、そして日本の支援者のすばらしさを感じました。残念ながら現在の混乱が良い方向に向かう見通しはなく、当面の支援はほとんどが薬品の供給ということになりそうです。まさしくイラクの白血病のこどもたちはJIM-NETや日本の支援者のみなさんによって強く支えられていると言えるでしょう。

医師たちの報告を合わせて考えると、急性リンパ性白血病（ALL）の治療開始後の寛解率はおよそ80%前後であるようです。数字だけで判断すれば、寛解率が95%を越える日本と比較するまでもなく、決して良い成績であるとはいえません。しかし、医療を取り巻く現状（薬品不足をはじめ、輸血製剤の不足、病棟の衛生状況、検査体制の悪さなど）を考えると、むしろ、がんばってよくここまで成績を上げて

いるといえるのではないのでしょうか。今あげた現状の問題は、今後、治安が安定してくれば解決に向かっていくことが期待できます。

国内の混乱に伴う診療の難しさについては、会議を通じて（これまででも、今回も）様子がよく伝わってきました。JIM-NETのメンバーが日本のみなさんにこのような状況を伝えることで、多くのみなさんが共感してくれて、みなで支援していこうということでJIM-NETとしての医療支援活動の今が成り立っていると思います。しかし、ひとりの小児科医師としては、いまひとつ診療の状況、こどもの様子が見えてこないという感想も持ちました。今回、イラクの医師は、寛解に入らずに亡くなった（いわゆる予後不良例の）何人かのこどもについての経過を報告してくれました。時間的な制約があつて意見交換はほとんどできませんでしたが、私にとっては非常

に興味ある話でした。私たちは、治療成績を妨げている原因が主に白血球減少による感染症、血小板減少による出血にあると考えています。そして、これに對して感染管理専門看護師育成の研修や成分輸血機器を支援してきました。しかし、今回の話を聞いていて、

「専門医以外の医師は白血病の診断が行えないのではないか?」「事前の判断で全身状態の悪化を回避できなかったのか?」「検査体制が非常に弱く、感染症に對してほとんど情報が得られないまま治療を行なっているのではないか?」「状態が悪化したときの全身状態の把握はしつかりできているのだろうか?」「G-CSF（白血球を増やす注射薬）を上手に使えていないよ。だが?」といった新たな疑問がふつふつと沸あがってきました。もちろん医師としての力量を疑っているわけではありません。そうではなく、これまでの、新しい知識を上手に使う機会のな

さ、経験の少なさ、診断や治療粗悪さ、などに由来する大切な診療上の問題がまだまだ見えてきていない気がしているのです。

ベラルーシの医療協力のとときと全く同じことですが、双方の信頼関係のもとで意義ある医療支援にするためには、物的支援とともに、技術、知識などの医学的支援にも力を入れていく必要があります。そのためには、病気のこどもを一緒にみて考えることが重要ですが、イラクの治安状況を考えると、当面はイラクの病院に私たちが行くことは無理のようです。イタリアの病院がバグダッドの一部の病院と衛星回線を通じてカンファレンスをはじめたことで、それは非常に有効な方法だと思いました。しかし、私たちが今できることとして、私は、治療がうまく行かなかつたこども個々の例をひとつひとつ詳しく見直して、問題点を一緒に確認しあつていく、という作業が有

効ではないかと考えました。次回以降の会議でそのための時間を作っていけるよう、スタッフ間で検討したいと思っています。

イラクの医師からは、白血病のこどもが治療を受ける上で、こどもたちやその家族に心理面や生活面での問題がみられる例が少なくない、との話もあつて、気になりました。しかし具体的な説明はありませんでした。白血病の診療では、数年間にわたる薬物治療とていねいな体調管理が求められるため、心理的な不安や生活面での困難は、そのつど、できるだけ解決していきたいところです。どのような問題が生じているのか、私たちからも工夫をして、上手に情報収集して、一緒に考えて行けるような形にするのが良いと思います。

ところで、イラクではこの数年の戦争、紛争によって白血病や血液腫瘍性疾患が増加しているのではないか、

という指摘があります。アメリカ合衆国が戦闘に使用した劣化ウラン弾の影響を指摘する人もいます。しかしこれは本当なのでしょうか？参加したイラクの医師たちによれば、自分たちの病院を受診する白血病のこどもの数は増えているようです。でも、これだけでは発症率が増加した根拠にはなりません。また、残念ながら、イラクでは過去20年にわたって（政治的不安定さのために）人口動態が正確に把握されておらず、正確な病気の発症率を計算することが非常に困難のようです。

地域における病気の発生や特徴、それらが時代によってどのように変化しているのかといった情報は、病気の原因を理解したり対策を立てる上でも大切です。幸いなことに、会議に参加したイラクの医師には、このような疫学的な評価に関心のある医師が少なくなく、それらしい形を作って統計学的情報が出始めました。これらの動

きがさらに発展して正確な情報としてまとまることを期待しています。ただし、情報を集めて整理するための基本的技術を有していないため、せっかく情報を収集しても有効に生かされず、情報の正確性に問題が大きい結果になつてしまう懸念があります。現状を科学的により正確に把握し、内外に向けて発信することは、世界に向けてイラクの医療の問題を発信する強い情報となるだけでなく、イラク国内の（専門医ではない）医師に小児白血病患者という疾患を知ってもらい、地域レベルで診断精度を高めていくこと、早い時点での診断、あるいは専門医間の共有意識の確立や連帯感の醸成にも寄与すると考えられます。そのためには、研究の目的（何を明らかにしたいのか）を定め、それに即した良い計画を立ててからデータを収集していくことが必要です。この点についても、私たちが指導することは可能であり、希望があれば

協力していきたいと考えています。

2 ノーマンズランドの医療視察に同行して

9月21日（木）、青い空のあちこちに浮かぶ雲が、アンマンに秋の訪れを告げていました。朝5時にアンマンの



ノーマンズランド難民キャンプ

ホテルを出発し、車で東に5時間ほどの、ヨルダン―イラクの国境にあるノーマンズランドの難民キャンプに医療視察に出かけました。国連UNHCRから委託を受けたユニセフ（UNICEF）の視察に同行することを許されたのです。彼らの目的は（1）医療視察、（2）予防接種、（3）家族計画の指導と避妊具の配布、（4）イラク国内に戻ることを勧める、ということでした。（4）については「？」と思いました。これについて少し説明しますと、イラクとヨルダンの国境は、それぞれの国の国境検問所の間に約1kmの緩衝地帯（砂と土だけの何もない土地）があり、本来はひとが立ち入って生活することを許されない場所なのですが（だからこの場所を「ノーマンズランド」と呼びます）、約1年前に、イラクから逃げ出してきた人たちが国境を越えてこの土地にテントを張ってキャンプ生活を始めたのです。国連、イラク、ヨル

ダン、いずれも認定していないキャンプとすることで、基本的にはイラクに戻って、元の住居で生活するか、国内の難民キャンプに入るよう説得をしています。彼らはもちろんパスポートは持っていないので、本来はイラクに戻るしかないのです。しかし、彼らは国内での生活に危険を感じて（単なる治安悪化による危険だけでなく、政治的宗教的な危険もあるようです）イラクから脱出してきた人たちですので、国内に戻ることはどうしても抵抗があり、イラク以外の国へ移住することを希望しています。国連が最低限のケアをしているようですが、国境を通過するトラックから食料を少しずつ分けてもらって生活している、という話でした。衛生面の環境も悪いように見受けられました。

砂漠の中をひた走り、国境近くのルウェイシッドという町でヨルダン保健省のスタッフフナース、ヨルダン

人医師2名と合流し、薬品や予防接種薬を確保して国境に向かいました。ヨルダンの国境検問で30分ほど足止めされ審査を受けたのち、ヨルダンの警察に導かれながら緩衝地帯の真ん中まで進み、今度はイラクの警察に導かれてイラクの検問へ。車は検問所横の警察本部に導かれ、私たちはわずかですがイラク国内に入ったことになり、緊張と興奮で会話が少なくなりました。しかし、警察内に案内されると、意外にも（失礼）イラクの国境警察からとても親切な対応を受け、驚きました。警察署長からは、イラクがもとも持っている日本に対する友好的な感情、難民キャンプの人たちの背景と現状などについて説明があり、「この、悲しいキャンプの様子を、ぜひ世界に伝えてください」と撮影もインタビュウも許可してくれました。キャンプにいる185名のほとんどがイラン系クルド人で、20年以上前のイランイラク戦争



ルウェイシッド難民キャンプで検診するスマイルクリニック・森田医師

りました。参加メンバーも、検診に合わせて到着したスマイルクリニックのスタッフに、JIM-NEET会議を終えたJCFのメンバーにもご協力をいただいたので、総勢13名という心強いチームになりました。

今回の検診では、従来の診察のほかに、前回の検診データと比較して身長や体重の成長に問題がないかを検討すること、診察や計測ではわからない重大な問題点についても評価したいとの観点から、検尿を行いました。

アンマンを朝に出発すると、どうしても診療時間が十分確保できなかったため、23日夜にルウェイシッドに入り、24日は朝からキャンプに入って検診を行ないました。このキャンプは一昨年に初めて訪れたときには700人ほどが生活していましたが、少しずつ、欧州やオセアニアなどの国に移住を許された人が移っていき、今は200名ほどに減っていました。キャンプ内にはCAREというオーストラリアのNGOが常駐して生活面でのサポートをしていましたが、そのグループも引き上げっており、私たちはCAREが残した大きいテントを利用して検診を行ないました。

私たちがキャンプに到着すると、診療所前には黒髪をなみなみと蓄えた屈強そうな若者が10人ほどたむろしており、降りてきた日本人に珍しそうな

視線を投げかけながら、「アラビア語は話せないのか？話したいことがたくさんあるんだが（以上、アラビア語）」などと、親しげに話しかけてきました。その後も少しずつ子どもたちが集まってきました。

日本ではないので、きちんと並んで順番に、というわけには行かないのですが、テントの中にはぎやかなうちにもトラブルなく検診は行なうことができました。いつものことですが、キャンプで生活している人たちの中に、英語とアラビア語、英語とクルド語を話せる人や、医療の経験者などがいて、自発的に私たちを助けてくれます。ときには3人くらい通訳を介して身振り手振りも入れて問診を行なうこともあります。そんなときは顔つきや皮膚の色は違ってもみんな同じような一生懸命な表情をしており、はたからみていると面白いのです。

大きな病気のある子どもはいませ

のとき以来、ずっと難民生活を続けているとのことでした。しかし、私の意に反して、話をしたほとんどの人は感情的になることなく、「イラクには戻れない、第三国で平和な普通の生活がしたい」と語り、イラクの警察と同じく「このキャンプの様子をしつかり伝えてください」と、自分のことやキャンプの様子を紹介し、親切に対応してくれました。外にでている子どもたちを見回す限り、みんな元気にしているようでした。ただ、子どもたちは私たちの周りにも集まってきましたが、はしゃぐような様子はなく、笑顔が少ないなあ、という印象を受けました。このキャンプではこの1年間に7名の子どもが生まれましたが、1名が危険があつて特例でルウェイシッドの病院で出産した以外は、みなキャンプ内でお年寄りが中心になって助け合つて出産をしたそうです。最低限の水や食料は提供されているようですが、十分なも

のとは言えず、国境を通り過ぎるイラクのトラック運転手からときどき差し伸べてくれる野菜や米を大事に使っているようでした。

2時間という限られたときはあつという間に過ぎてしまい、私たちはこどもの健康を十分に把握することができませんでしたが、視察後、イラク警察のみなさんと話をしていた、彼らは立場上キャンプの存在に困りながらも、個人的にはキャンプの人たちの現状をとて心配し何とかしたいと強く思っている様子が良く伝わってきました。アンマンへの帰路、イラクの人たちの優しく暖かい対応を思い、それゆえに、キャンプの人たちの辛い状況がなおいっそう悲しく思い出されました。アンマン会議のときに、サルマ先生がおっしゃっていた、「すべてのイラク人は自分の悲劇を持っている」という言葉を思い出しました。



ルウェイシッド難民キャンプで、鎌田理事長

3 ルウェイシッド難民キャンプでの健康診断について

ルウェイシッド難民キャンプはJVC（国際ボランティアセンター・JIM-NEETのメンバー）とスマイルこどもクリニックが、JIM-NEET会議の日程に合わせるようにして実施しており、今回が3回目の検診になります。私も3回目のルウェイシッド訪問にな

んでしたが、全体に少し痩せてきている傾向があるのと、尿の異常が約1割ものこどもに認められたのはちょっと驚きでした。個々のこどもの問題点と合わせて診療所の医師に申し送りしました（後日、正式なレポートを送ることになっていきます）。前回までの検診のときには、重大な病気を持ちイラクで



ルウェイシッド難民キャンプで検査の説明を聞く子供たち

治療していた途中で、逃げてきたこどもが何人かいたのですが、今回は（他国に移住できたため）いませんでした。新しい生活場所での良い診療を受けることができていればいいなあ、と思いました。

それから、こどもたちは私たちや私たちの持ち物に興味を持ってあちこちついたり話しかけてきたりしましたが、ノーマンブランド・キャンプと同じく、笑顔や自然な表情の表出が少ないような気がしました。でも、中東のこどもたちが同じかというところではなく、アンマンの貧困地区や砂漠の中の村のこどもたちは、みんな良く笑い、はしゃぎ、恥ずかしがるといった、喜びや興味などの感情が素直に表情やしぐさに出ていました。

貧しい地区や豊かではない田舎でも、安定した生活の場があるこどもたちは集団を形成し、遊びを見つけて楽しくしていたし、陽気にこちらに話し



元気に遊びまわる村の子どもの笑顔

かけてまとわりついてきました。みんな写真に写りたがったり、年長のこどもが小さいこどもたちのやんちゃをたしなめる場面をたびたび目にしました。日本にはほとんどみかけない、ほえましい風景でした。それだけに、キャンプの生活がいかに潤いのないものであるかを、こどもたちの表情は示しているのだと思いました。

キャンプでは大人がいらだつ姿も目に付きました。「健康診断に来てこ

どもと笑って過ごすのもいいが、そんなことでは何にも解決しない。私たちを安心して過ごせるところに移してくれ。」と大声で怒鳴る人もいました。このキャンプの生活者の多くは、もともとはイラクで普通に生活していた人たちでしたが、ここへ来て、生きていく程度に食事はできるものの食べたいものが食べられるわけではなく、仕事はなく、遊ぶこともなく、ただ時間をもてあますだけという、想像もつかない生活に一変してしまい、それが4年も続いています。少しずつ居住者が新しい国に移っていく中で、自分たちが取り残されるせつなさもあると思います。自分にはこんな経験はないので、

正直なところ、彼らの気持ちを本当にはわかってあげられていないような気がして、辛かったです。

イラクでは保健行政や市民生活も混乱が強まっているようで、こどもの健康についても、予防接種や定期健康診

断といった制度はかなり崩れているようでした。また、日本の母子手帳のように、予防接種の記録もないので、どの子がどの接種を何回受けたか、記憶に頼るしかありません。混乱が今後とも長期的に続いた場合、感染症の流行などが危惧されました。保健行政は日本の得意とするところであり、この分野での貢献も、今後、重要かつ有効ではないかと思いました。

最後に、前回（1年前）の検診で診察した悪性リンパ腫（血液がんのひとつ）の4歳の女の子が、この春に病気が悪化して亡くなったと聞きました。私たちは定期的にフォローしてもらうように、とコメントし、実際にアンマンの一般病院でフォローしていたので安心していました。しかし、今回、よく聞いてみると、彼女を担当していた医師は、定期的に診察をしたが検査は全くしていなかったとのことで、日本のフォローとの違いに私たちは驚き

しました。（アンマン会議でも、白血病などの医師が他の疾患と診断し、半年近くも間違った治療をしていた、というような話もありました。）この地域において「病院でみてもらう」ということが、私たちが日本の常識で考えていることとはかなり違っている、ということを確認しました。今後、医療的な支援を行なっていくときに、この点を踏まえて、発言しないといけないと思います。

以上、駆け足でお話させていただきましたが、日本の私たちの差し伸べた手をイラクのこどもたちやそれを支える大人たちがしっかりと握り返して、良い関係ができてきていると感じました。そして私たちのこの手がなければ助からないこどもたちがたくさんいた事実もそこにはありました。しかし、医師としては、医療支援としてはまだまだこれからである、ということも感じた今回の訪問でした。

イラクの子どもたちの絵を、 もっともっと見て欲しいから…



新しいポストカードができました
来年の年賀状にもお使い下さい！

国井 真波（JIM—NET）

サブリーンプロジェクト

「もっともっと、イラクの子どもたちの絵を、多くの人に見てもらいたい」そんな思いから始まったのが、「サブリーンプロジェクト」です。

サブリーンの絵は、「限りなき義理の愛作戦」でも使われており、ユニークで、カラフルな絵が特徴です。彼女の絵をポストカードにして4枚1セットで販売することが決定した時、私の中でクリアしなければならぬ問題が2つ生じました。

一つは、サブリーンの絵をデータ化して絵葉書用にレイアウトする作業の依頼、二つ目が、1000部印刷した後、その袋詰めを誰にお願いするかです。JIM—NETは、東京にボランティアがあまりいないので、お手伝いしてくれる人を探すのが難しい状況がありました。

どうしようかと思えばく考えた後、

たくさんの子どもの絵を、みんなさんに見ていただけるように企画を考えていきたいと思っています。

仕事でイラストレーターを駆使し、尚且つJIM—NETの活動に共感してくれている友人に、ポストカードのデータ作成をお願いしてみました。友人は快く引き受けてくれて、何度かメールでやり取りをした後、数日後にはとってもステキなものを完成してくれました。そのデータを印刷会社に送ってから、私たちは、「ちゃんとできてくるかなあ」とドキドキでした。

家族も応援

約1週間後、自宅に送られてきた大きなダンボールを開けてみると、可愛い絵がわんさか目に飛びこんできました。どれもこれも思ったとおり！自宅にいる母に声をかけて、早速袋詰めを開始。いつの間にか100部終了。すると母が、「残りは時間のあるときに、やってあげるわよ」と。すかさず「じゃあ、お願い！」と、私は母の好意に甘えることに。これで第二関門もクリ

アです。ところが翌日仕事から帰ると、ポストカードが800部ちかく、すでにセツトになって積み重なっていました。母曰く、「お父さんにやらせたのよ。最初は文句言ってたけど、楽しそうにやってたわよ。」と。すると父が顔を出し、「残りは明日やっておくから」。ポストカードの袋詰めを家族でやってみると、普段私は、JIM—NETがどんな活動をしていて、イラクがどんな状況にあるか、家族に全然話していないことに気が付きました。

両親としては、「うちの娘は、よくわからないけど、イラクの支援活動をやってる」程度の認識だったわけです。袋詰めをしながら、イラクについてあーでもない、こーでもない、家族で話することができたのは、大きな収穫でした。

「イラクの子どもたちの絵を多くの人に見てもらいたい」という気持ちは今でも変わりありません。これからも、

ポストカードの収益金は、サブリーンをはじめイラクのガンや白血病の子どもたちの支援に使われます。

■ ポストカードのご購入について

- 価格：1セット(4枚組み)…400円
- 送料：1～2セットの場合、送料80円
3セットの場合、送料110円
4セット以上のご注文の場合、送料はJIM-NET負担。

◆ 郵便振り替えて申し込んでください。

郵便振替口座：00540-2-94945 口座名：日本イラク医療ネット
※ 通信欄に、セット数を必ずお書きください。
※ お名前（フリガナ）・ご住所を正確にご記入ください。
(払込み手数料はご負担願います。)

宮尾 彰

NO.25

たわわに実った稲穂が秋めいた涼風にゆれる日の午後、新潟県十日町市を訪ねました。この夏で第三回を数える「大地の芸術祭」は、国の内外から二百組の芸術家を迎えた大規模な催しです。それは、震災の傷痕と進行する過疎化の只中にある山深い豪雪地帯で、「農業を通して大地とかかわったすえの生活と風土」を新しい目で捉え直そうという試みでもあります。特に今回、朽ちかけた廃屋に新しい生命を吹き込もうという作品群が話題になりました。

フランスの作家クリスチャン・ボルタンスキーが、廃校の建物全体に暗幕を張り巡らして劇場化した作品『最後の教室』もそのひとつです。

体育館跡の入口から一歩中へ足を踏み入れると、そこは真つ暗闇。観客は乾いた風と懐かしい匂いに包まれながら、しばし目が闇に慣れるのを待ちます。足下の床全面に藁が敷き詰められ、十数台の長椅子の上にひとつずつ置かれた扇風機が宙に向かって首を振っています。高い天井からは、ひとつひとつ長いコードで吊された数十個の裸電球がほの暗い光で瞬きながらゆれています。

闇の中に散りばめられた光の群れが、私たちの心の奥にある蛍や灯籠流しのような陰りを帯びた夏の記憶を呼び覚まします。藁を踏みながら廊下に出ると、観客は静かな光に導かれて校長室、放送室、と過ぎ、階段を二階へ進みます。

…ここで、先ほどこら続く不思議な音響と振動が一層高鳴ります。



写真提供 本橋成一



写真提供 本橋成一

「どっくつ、どっくつ、どっくつ、…」そこには「理科室」が待っています。部屋の隅に据えられた二台のスピーカーから聞こえてくる心臓の鼓動に合わせ、たつたひとつ部屋の中心に吊された裸電球が点滅します。すると、すべての物が運び去られて何もない空間に、のっぺらぼうの実験台が闇の中から現われては消えるのです。台の脇には、実験の後始末をするための水道の蛇口が三つ、首をそろえて頭を垂れ、冷たく光ります。

直感的に「ある場所」が連想されました。私が知る由もないこの「ある場所」の空気が、この部屋には生々しく現前しているのです。

ことばによらず、私のからだだけが直に受けとつたものが、確かにありました。

私の作品は収容所についてのものではありません。それは収容所以後のもののなのです。西洋の現実にはホロコーストによって変わりました。私たちはもう、ホロコーストを見ずして何ものも見ることができないのです。しかし、私の作品はホロコーストについてのものではありません。それは死全般に関わるもの、私たちすべての死に関わるもののなのです。

後日ひといた作家の評伝は、私の印象を裏付けるに十分なものでした。

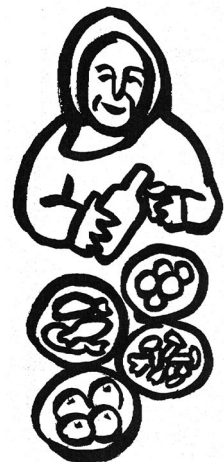
ホロコーストとマクドナルドは似ています。そう思いませんか。というのも、加害者と被害者のあいだに、生産者と消費者のあいだに人間的な絆が欠落していて、いっさいが迅速かつ大量に処理するプログラムに支配されているからです。

他ならぬ私たちの生と死が、巨大な「収容所」の内側に在るのかもしれない。

ロシア小話

◆もし、女性が働くと—それは彼女の収入になる。
もし男性が働くときは—それはたいせつな義務である。

◆もし男性が仕事を休んだ場合は、彼は意気地なしです。
女性が仕事を休んだ時は、家事でクタクタになり、彼女に一抹の感謝さえ無かったのです。



◆赤ちゃんの面倒をみるために休暇を取る女性は、母親であり、それが母の権利である。
赤ちゃんの面倒をみるために休暇を取る男性は、彼は雑巾（女性につくしてボロボロになる）、それ以上働く能力がなかったのではない。

◆もし女性がレストランでご機嫌なら、すなわち彼女にご馳走してもらうことに同意した。
もし男性がレストランで機嫌がいいなら、彼は雑巾（女性につくしてボロボロになる）か男妾である。

◆もし女性がセックスをしたくないときは、彼女は頭が痛いのでしょう。もし男性がセックスをしたくないときは、彼は無造作に服をぬぐでしょう。



АНЕКДОТ



◆Если женщина работает — Это её заслуга.
Если мужчина работает — Это его
первейшая обязанность.

◆Если мужчина не работает, то он тряпка.
Если женщина не работает, она истощена
домашней работой и не получает за неё
ни капли благодарности.

◆Женщина, которая берет отпуск по уходу за ребёнком,
— мать и имеет на это полное право.
Мужчина, который берет отпуск по уходу за ребёнком,
— тряпка, и больше ни на что не способен.

◆Если женщина не платит за себя в
ресторане, значит, она согласна чтобы её угостили.
Если мужчина не платит за себя в ресторане, то он
тряпка и альфонс.

◆Если женщина не хочет заниматься сексом
то у неё болит голова.
Если мужчина не хочет заниматься сексом то он
бездушная сволочь.

振替用紙のメッセージから



◎内戦状態が続いています。ますます混乱が続くイラクの中、活動よろしく御願います。
(東京都)

◎世界中のどの家族でも子どもが子どもらしく生き生きと過ごせることを願って。わずかですが想いを託します。
(長野県)

◎地球上の人々のしあわせを願って贈ります。
(神奈川県)

◎わずかですが長く続けられたらと思っています。
(神奈川県)

◎少しでも頑張ってください。
(東京都)

◎日本人のメッセージを伝えて下さい。「元氣になつて世界を良くして下さい」と。
(東京都)

◎私も甲狀腺のない一人としてナジエジダ2006応援します…がんばってください。
(愛知県)

◎ごくろうさまです。ナジエジダ2006必要とお送りします。会費共にお受け取り下さい。
(東京都)

◎8月から約1カ月フランス、ドイツの旅となり、今年度のスタディツアーにゆけないのが残念です。旅費のうちから天引きしてお送りします。
(長野県)

◎水俣病について言及された宮尾彰さんのエッセイが心の深くを揺さぶりました。『この世でもっとも嘆きの深い水俣』を私もこれからはずっと見つめていきたいと思いました。
(長野県)

◎父(百才)が4月に亡くなりましたが先生が最後まで手をつくして下さいたことに感謝しております。些少ですが最新医療機器で子どもたちの健康を守ってください。
(東京都)

◎二女がわずかな収入の中から寄付してくれたので少し足してお送りします。わずかですが役立てて下さい。
(長野県)

◎私には今、2才と4才の娘がいるせいでよけいに、世界に病氣や戦争に苦しんでいる子どもがいると聞くと、せ

つなくなりま

(埼玉県)

◎日本人はとくに東アジアの人たちともっとも話をしなければ…靖国問題も含めて…
(新潟県)

◎ずっと胸を痛めていたチエルノブイリの事故。子ども達が成長したので何か役に立つことを始めたいと思います。
(東京都)

◎CD、早速送っていただきありがとうございます。友人にすすめてみます。地道で着実な活動を今後も続けてください。20年の節目で区切らず、これからもずっと。
(京都府)

◎チエルノブイリとイラクの子どものための『希望』のために。
(長野県)

◎私も年2回のエコーのお世話になっています。とても大切なものです。感謝の気持ちをお送りします。(京都府)

◎「ひまわり」、疲れた時にサックスがとても心に響きます。ありがとうございます。
(茨城県)

◎中東が泥沼化しています。一日も早

く平和を祈ってます。
(東京都)

◎CDとても気に入って、いつもかけています。友人、知人への贈り物にします。CD代+少しのカンパです。
(埼玉県)

◎会報をいつも楽しみにしています。この活動が長く続きますように。
(山梨県)

◎一日も早く新しい機器を届けられるように、少しでもお役に立てれば…と思います。
(兵庫県)

◎暑い夏、原爆の悲劇を語り継ぐ人たちの声に静かに耳を傾けます。
(石川県)

◎送金遅くなりました。忘れないでいたい『チエルノブイリ』
(兵庫県)

◎私より若い人たちが、みんな活躍していることを頼もしく嬉しく誇りに思いました。世界の平和を願いつつ。
(東京都)

◎少額ですがエコー購入資金の一部に。
(埼玉県)

◎年金の中から貯めた小銭貯金です、ささやかですが、子供さん達へ。
(東京都)

◎からだが重く、頭が硬くなって自分で動けない分、ガンバレ、ガンバレ。グラントゼロ送っていただき有り難うございます。応援していきます。
(東京都)

◎子供達に罪はありません。どの国の子供達にも。どの国の子供達も健康で、幸せに生きる権利があります。
(茨城県)

◎何もできませんが賛助会員になりました。
(愛知県)

◎私の知人が真心をこめて寄付して下さいと私に渡して下さいたお金です。
(茨城県)

◎気にしながら行動を止めたままです。てしまいました。
(長野県)

◎4月マリオンで楽しい一時を過ごさせて頂きました。
(静岡県)

ニュースクリップ

●機器の誤設定 25 年間放置

東京電力は、福島第一原発 5 号機で、1981 年に計測機器の設定ミスがあり、その後 25 年間、気付かずに放置していたと発表した。問題があったのは、緊急時に原子炉格納容器にたまる気体の水素と酸素を排出し、水素爆発を防ぐためのシステムにある気体流量計。(6 月 22 日 共同通信)

●タービンの異常振動、羽根脱落が原因

中部電力は、浜岡原発 5 号機が発電用低圧タービンの異常振動で自動停止した原因について、タービンのクロム鋼製羽根 1 本が根元から折れて脱落したためと発表した。(6 月 23 日 毎日新聞)

●再処理工場の作業員また被ばく

日本原燃は、六ヶ所再処理工場の分析建屋で試料の分析作業をしていた協力会社の男性作業員が体内被ばくした可能性が高い、と発表した。再処理工場での体内被ばくは、5 月中旬に次いで 2 人目。(6 月 24 日 東奥日報)

●日本原燃に再発防止指示

使用済み核燃料再処理工場の分析建屋で、2 度にわたり作業員が体内(内部)被ばくした問題で、経済産業省原子力安全・保安院は、日本原燃の児島伊佐美社長を呼び、原因の究明と再発防止策の策定を指示した。(6 月 26 日 時事通信)

●アクティブ試験第 1 段階終了

日本原燃は、六ヶ所再処理工場で実施している最終試運転(アクティブ試験)で、5 段階の工程のうち第 1 ステップが終了したと発表した。試験中の機器の調整やトラブルへの対応などから約 1 カ月遅れとなった。(6 月 27 日 東奥日報)

●福島第一 1 号でも 26 年間ミス放置

東京電力福島第一原発 5 号機の気体流量計で設定ミスが 25 年間放置されていた問題で、東電は同 1 号機でも同様のミスが約 26 年間放置されていたことが分かったと発表した。東電は検出器の設定を修正するほか、求められた流量を確保できるかどうか調べる。(6 月 29 日 共同通信)

●新たに 50 本の羽根に欠損やひび割れ

中部電力浜岡原発 5 号機が発電用タービンの異常振動により自動停止した問題で、同社は、新たに 50 本の羽根に欠損やひび割れが見つかったと発

表した。これを受け、経済産業省原子力安全・保安院は、同型のタービンを使用する北陸電力志賀原発 2 号機に対し、早急に運転を停止し点検を行うよう指示した。(6 月 30 日 毎日新聞)

●志賀 2 号機点検、タービン羽根確認

中部電力浜岡原発 5 号機のタービン羽根破損事故を受け、経済産業省から同型タービンを備えた志賀原発 2 号機の点検を指示されていた北陸電力は、同機の原子炉を停止させ、40 日間の予定で点検を行うと発表した。(7 月 4 日 共同通信)

●福島第一 3 号でもミス を 30 年放置

東京電力福島第一原発の 1 号機と 5 号機で、気体流量計の設定ミスが 25 年以上放置されていた問題で、東電は、同 3 号機の冷却水流量計でも、運転開始から約 30 年間、設定ミスが放置されていたと発表した。(7 月 6 日 共同通信)

●他のタービン 2 基にもひび

浜岡原発 5 号機のタービン破損事故で、ほかの 2 基のタービンを含めて状況を調べていた中部電力は、3 基で計 283 枚の羽根の付け根にひびがあり、うち 125 枚では根元の一部が欠けていたと発表した。羽根を取り付ける車軸にもひびが入っているのが見つかった。(7 月 6 日 共同通信)

●東北電に安全総点検を指示

経済産業省原子力安全・保安院は、東北電力に対し、配管の管理を徹底できなかった上、流量計データ改ざん問題に対する再発防止策が不適切だったとして、安全にかかわる品質保証体制を総点検するよう異例の指示をした。(7 月 8 日 共同通信)

●志賀原発でも羽根にひび

中部電力浜岡原発 5 号機のタービン破損事故を受け、経済産業省の指示で同型タービンを持つ志賀原発 2 号機を停止し点検を行っていた北陸電力は、タービン 1 基の動翼で羽根 2 枚にひび割れを確認したと発表した。(7 月 18 日 共同通信)

●羽根のひびは計 146 枚に

北陸電力は、志賀原発 2 号機で、タービン羽根のひび割れを新たに 144 枚確認したと発表した。ひび割れは、これまでに分かっている 2 枚と合わせて計 146 枚になった。(7 月 25 日 共同通信)

●劣化ウラン兵器、広島で禁止訴え

「劣化ウラン兵器禁止を訴える国際大会」が、広島市の広島国際会議場で始まった。劣化ウラン兵器の被害者支援や「禁止条約」実現への方策を話し合う。約 20 カ国の約 80 団体が賛同・参加する NGO ネットワーク「ウラン兵器禁止を求める国際連合」の主催。(8 月 3 日 毎日新聞)

●再処理工場、試運転の第 2 段階

六ヶ所再処理工場でアクティブ試験(試運転)の第 2 ステップを進めている日本原燃は、使用済み核燃料のせん断・溶解工程に着手し、作業を本格化させた。せん断に伴い、フィルターなどでは除去できない気体状の放射性廃棄物クリプトン 85 が排気筒から大気中に放出される。(8 月 19 日 東奥日報)

●原発耐震指針改定取りまとめ

原発の耐震指針の見直しを進めている原子力安全委員会の耐震指針検討分科会は、4 月にまとめた指針の改定案をわずかに修正し、分科会の結論として取りまとめた。改定案に対し国民が寄せた意見は約 700 件に達したが、修正は語句の表現など最小限にとどまった。このため、地震による原発事故の恐れを指摘してきた石橋克彦委員(神戸大学教授)は「納得できない。国民への背信行為になるので委員を辞任する」として会議途中で退席した。(8 月 29 日 中国新聞)

●米が臨界前核実験

米エネルギー省は 30 日、通算 23 回目となる核爆発を伴わない臨界前核実験を、ネバダ州の地下実験場で行い成功したと発表した。前回の 2 月の実験から半年ぶり。(8 月 31 日 共同通信)

●プルトニウム保有量が史上最多

日本が 05 年末時点で国内外の原子力施設に保有しているプルトニウムは約 44.1 トンに上ることが分かった。昨年に引き続き史上最多を更新した。保有量は 04 年末に比べ約 1.0 トン増えた。保有総量は原子爆弾なら約 4410 発が製造できる量に相当する。(9 月 5 日 毎日新聞)

●中央アジアが非核地帯に

中央アジア 5 カ国は、域内での核兵器の開発・生産・使用・配置を禁止することをうたった非核地帯化条約に調印した。署名式は、5 カ国の外相級が旧ソ連最大の核実験場だったカザフスタンのセ

ミパラチンスクに参集して行われた。調印したのはカザフスタン、ウズベキスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン。

(9 月 8 日 時事通信)

●22 年間流量計設定値を不正入力

日本原電は、定期検査に合格させるため、東海第二原発の流量計の設定値を 22 年間にわたり不正入力していたと発表した。経済産業省原子力安全・保安院は、同社を厳重注意し再発防止策の徹底を求めた。82 年から弁を全開にしても必要な流量を確保できなくなったため、不正な操作を繰り返したという。(9 月 8 日 毎日新聞)

●流量計設定で不適切数値 30 年以上

日本原電は、敦賀原発 1 号機で、制御棒駆動水系の流量計に不適切な数値が設定されていたと発表した。原電は正しい数値に修正した上で、「設計に余裕があり、運転には問題がなかった」としているが、不適切な数値の設定期間は 30 年以上に及ぶとみられる。(9 月 9 日 福井新聞)

●美浜 3 号、今後 10 年運転継続

関西電力は、今年 12 月に運転開始 30 年を迎える美浜原発 3 号機について、今後 10 年程度運転を継続する方針を県と美浜町に報告した。県内で運転開始 30 年以上となる原発は 6 基目。(9 月 9 日 福井新聞)

●米大統領、対テロ「勝利へ一致結束」

ブッシュ米大統領は 11 日夜、同時多発テロから 5 年にあたりホワイトハウスから国民向けにテレビ演説し、対テロ戦争について「いま敵を打倒しなければ、我々の子供たちが核兵器で武装したテロ国家と急進的独裁者によって侵略された中東に直面することになる」と警告し、勝利に向け国民が一致結束するよう訴えた。

(9 月 12 日 毎日新聞)

●原発タービン損傷、設計ミス を 正式表明

中部電力浜岡原発 5 号機などの蒸気タービンの羽根が大量に損傷した問題で、中部電力は調査結果を公表し、タービンの設計ミスによる金属疲労の可能性を正式に明らかにした。ただし、設計者である日立製作所への損害賠償については、「過失の程度がまだはっきりしない」として明言を避けた。(9 月 12 日 毎日新聞)

こんにちは！

Здравствуйте!



信州からJリーグへ

松本山雅、チームを支える人と人との心の輪



アルウィンスポーツプロジェクトの、ボランティアスタッフの皆さん

こんにちは。アルウィンスポーツプロジェクトです！JCFさんのフロアの一角をお借りして活動を始め、早2年になります。グラントゼロ62号でも取り上げて頂きましたので、ご記憶の方もおいでかと思いますが、私共は「信州からJリーグへ」を合言葉にJリーグ入りを目指すサッカークラブプロジェクトです。現在は北信越リーグ1部に所属する松本山雅フットボールクラブを母体とし、松本青年会議所のメンバー、及び各方面から集結したボランティアスタッフが中心となって活動が続けています。

今季、北信越リーグでは最終2位という結果で惜しくも優勝を逃しました。来年こそ是非とも優勝し、地域リーグを抜け出してJFLリーグ昇格に挑みたいと決意を新たにしております。また天皇杯においては9年ぶりに本戦へ出場し、2回戦まで駒を進めることが出来ました。9月10日長

野県大会で優勝を果たし、17日天皇杯1回戦、京都代表同志社大学を勝ち破りました。2回戦は北海道札幌へ飛び、「新日鉄大分」戦に臨み、敗退こそしましたが、経験という収穫を得ました。この2年、私共の地道な活動に賛同して下さったスポンサーの皆様、サポーターの皆さんが「気持ちはひとつ」「信州からJリーグへ」と、熱い思いを送り続けて下さり、我々に全国進出の一步を与えて下さったのだと感じています。どんな世界でも、人と人の心が輪をつくり力を持ち、パワーを生み出していくのだと実感致します。

事務局での実務、ホームページの管理運営はボランティアスタッフでこなしています。

5名のメンバーは出社時間も、アルバイトの職種も、性格も声の大きさもバラバラですが、とてもアットホームな雰囲気の中で仕事を進めています。全く畑違いの我々がフロアをにぎわせ、ご迷惑をおかけすることもしばしばですが、JCFの方々の寛大さに甘える日々です。どこかで「松本山雅」の文字を見かけたら、是非、応援して下さい！

よろしくお願い致します。



松本山雅公式サイト
<http://alwin.org>



天皇杯長野県大会優勝、感激のシーン。松本山雅のホームスタジアム（アルウィン）

からだ
秘する肉体 大野一雄の世界
監修：大野慶人



秘する肉体 大野一雄の世界
監修：大野慶人
編集：クレオ
発行：クレオ
定価：2000 円＋税

Book

アート界・演劇界に多大な影響を与えた舞踏家大野一雄100年間の活動をまとめた写真集。細江英公、荒木経惟・山本宗補など42人の写真家たちが大野一雄の世界を捉えた作品108点を集録、同じく舞踏家として活躍する子息大野慶人が監修した。巻末には年譜と関連主要資料を掲載している。

また、あした
山本宗補



また、あした
—日本列島 老いの風景—
文・写真：山本宗補
発行：アートン
定価：1600 円＋税

Book

高齢化社会は、問題だらけで暗いのか？90年、100年生きた「生の達人たち」の表情を写真と文で綴る。北海道から沖縄まで、日本縦断お年寄り讃歌。著者は長野県出身のフォトジャーナリスト。

ショスタコーヴィチ against スターリン
戦争交響曲集

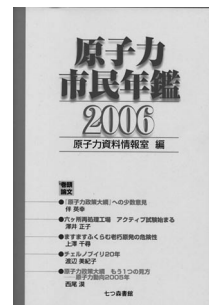


ショスタコーヴィチ against
スターリン／戦争交響曲集
販売元：ユニバーサル・クラシックス
定価：5040 円（税込）

DVD

今年旧ソ連・ロシアの作曲家ショスタコーヴィチの生誕100年。本作は、スターリン政権下の時代を生きたショスタコーヴィチとその作品を検証するドキュメンタリー作品。「戦争交響曲」と言われる交響曲第4番から第9番までを、ショスタコーヴィチ本人の映像や戦時の実情を伝える映像、家族・友人などの証言を交えて様々な角度から検証している。

原子力市民年鑑 2006
原子力資料情報室



原子力市民年鑑 2006
著者：原子力資料情報室
発行：七つ森書館
定価：3800 円＋税

Book

今年度版の巻頭論文は、「チェルノブイリ20年」、「原子力政策大綱」、「六ヶ所再処理工場」、「原発老朽化の危険性」の問題を取り上げている。データ編は、第一部「データで見る 日本」の原発（サイト別）、第二部「データで見る 原発をとりまく状況（テーマ別）」で、原発をとりまく最新情報を提供している。

ヒバクシャになったイラク帰還兵
佐藤真紀



ヒバクシャになったイラク帰還兵
—劣化ウラン弾の被害を告発する—
編著：佐藤真紀
発行：大月書店
定価：1400 円＋税

Book

イラク戦争に従軍した米兵ジェラルド・マシユーは劣化ウラン弾の残存放射線によって被曝し、帰国後生まれた娘は手に障害をおつていた。サマワに駐留した部隊でも深刻な放射線被害が明らかに——日本で報じられてこなかったイラクの衝撃的な放射能汚染の実態と、劣化ウラン兵器廃絶を求める国際運動の広がりをレポートする。

ひとりで悩まないで
ながの子どもを虐待から守る会



ひとりで悩まないで
—子育て中のあなたへ—
編著：ながの子どもを虐待から守る会
発行：オフィスエム
定価：476 円＋税

Book

虐待を乗り越えた母親たちによる体験記と、虐待から親子を守る様々な現場から、専門家やスタッフによる提言。巻末資料として、虐待ホットライン、相談窓口など、長野県内の主な相談先リストを掲載。



第 69 号

発行日 2006 年 10 月 26 日

発行人 鎌田實

発行所
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原浩
イラスト 武内裕子
表紙デザイン 酒井隆志
スタッフ 神谷さだ子
布山みな子
協力 風樹 光
オフィスエム
JIM-NET
印刷 電算印刷

■編集後記

米ペンシルバニア州ランカスターのアーミッシュの学校で、女子児童 5 人が射殺され犯人が自殺する惨劇が報道された。ハリソン・フォード主演の映画『目撃者・刑事ジョン・ブック』に描かれたアーミッシュの人々の暮らしが目に浮かび、あの静謐とも言える生活を送る人々は、この事件にどう対応するのだろうと心が痛んだ。しかしその後の報道で彼らは子どもの葬儀に犯人の家族を招き、許しをもって接したという。国家と教会の分離を確信し、一切の政治の宣誓にかかわることを拒否し、いかなる権威も偶像も認めないアーミッシュの人々は、やはりアメリカの中の異境なのだろうか… (布山)

■事務局日誌■

< 7 月 >

- 19 日 スタディツアー打ち合わせ
- 20 日 女鳥羽中写真展打ち合わせ
- 22 日 国労会議チェルノブイリ報告会 (長野国労会館)
- 27 日 グランドゼロ 68 号発送作業
- 27 日 戦後 60 年を問う会・まつもと (松本中央公民館)
- 28 日 NPO 会計処理について会計事務所との打ち合わせ
- 30 日 講演会「現場からの証言」(JIM-NET 共催) (東京)

< 8 月 >

- 1 日 日本化薬訪問
- 2 日 座談会「長崎から発信するヒパクシャ医療国際協力」
(長崎原爆死没者追悼平和祈念館)
- 3 ~ 6 日 劣化ウラン兵器禁止を訴える国際大会 (広島市)
- 6 日 スタディツアー打ち合わせ
- 8 日 スタディツアー第 1 グループ出発
- 11 日 松本原水禁チェルノブイリ報告会
(松本勤労者福祉センター)
- 16 日 スタディツアー第 1 グループ帰国
- 18 日 スタディツアー第 2 グループ出発
- 26 日 スタディツアー第 2 グループ帰国

< 9 月 >

- 7 日 日本化薬・ヨルダン大使館訪問
- 15 日 グランドゼロ編集会議
- 17 日 チェルノブイリからのメッセージ
(諏訪中央病院看護専門学校)
- 18 日 イラク支援訪問団出発
- 20 日 第 5 回 JIM-NET アンマン会議
- 25 日 写真パネル貸し出し (松本筑摩高校、女鳥羽中学校)
- 26 日 イラク支援訪問団帰国
- 28 日 介護シンポジウム (東京国際フォーラム)

< 10 月 >

- 2 日 松本筑摩高校チェルノブイリ写真展
- 4 日 写真パネル貸し出し (信州大学附属中学校)

JCF / 日本チェルノブイリ連帯基金

●本部 〒390-0303

長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263- 46- 4218 FAX 0263- 46- 6229

E-mail jcf@jca.apc.org

Website http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京 〒164-0003

東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレタイムス社気付

TEL03- 3227- 1405 FAX03- 3227-1406

●京都 〒607-8405

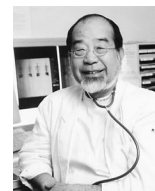
京都府京都市山科区御陵田山町 13-3

TEL075- 591- 7772

ちよい太でだいじょうぶ

鎌田實

メタボリック シンドロームに ならないコツ



ちよい太でだいじょうぶ
著者：鎌田實
発行：集英社
定価：1600 円＋税

